

超下位存在君の無駄な努力

ヘタレた御主人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世のため人のための人外による互助組織『UQホルダー』。そこに所属する末端の一人の少年が、本来の主人公である近衛刀太たちと関わりあっていくお話。

※超重要）自分は前作の「魔法先生ネギマ」をほぼ知りません。なので、色々矛盾が起きると思います。加えて、「UQ HOLDER！」の知識もあんまり詳しくありません。だから色々間違えると思います。

細けえこたあいいんだよ！

うるせえ！ 読もう！

という方のみお読みください。

この設定の間違い、勘違いは許さネエ！という方は感想の蘭にでも書いていただけると嬉しいです。

章を追加いたしました。

## 目 次

序章～黒い靄の男

プロローグ：自己紹介？

仕事場へゴー

お仕事ナウ～ホラーな教会にて～

飯は基本先輩の奢りという法則

報告と対策～きな臭い事案編～

この後きつちり給料から天引きされました

そうだ、京都へ行こう。

クエスショントライム～魂のカスについて～

お茶目に腕相撲！

セッティングと覗きは基本のセット

データにデバガメは付き物だよね！

破章～黒という存在

極めてLet, s コマ回し！

完全試合って、やられた方は面白くないよね

ゴツいおっさんのストーカーとかないわあ

痛くて熱くて苦しいのは如何？

絵面のシユールさをご想像下さい

今も昔も調べ物なら図書館で

青空作戦会議！

こう、お祭りって意味もなくテンション上がるよね

デートの甘さに苦味のアクセントつて至上

飲み過ぎ食べ過ぎ居心地悪過ぎには注意！

# 序章「黒い靄の男

プロローグ：自己紹介？

不死。

それは古来より生者が望む境地。

不死身。

辿り着きたいと多くの者が手を伸ばし、しかし掴み取ることの出来ないもの。

不老。

求めて止まぬ。しかし、排して止まぬ。人の枠を超えた化け物。

不死人。  
フシビト。

そんな、辿り着いてしまった化け物はそう呼ばれる。

そんな不死者たちが集まる互助組織がある。

組織名はU<sub>悠</sub>Q<sub>久</sub>ホルダー。

これは、不死人たちの中でも異端である一つの存在の無駄で無意味で無理矢理な奮闘物語である。

…………

闇にすら成り得ない黒があつた。  
ただ集まるしかなかつた塵芥は。  
いつの間にか、零になつていた。

…………

「おりやあああああああああ!!」

立派な旅館の廊下で元気な叫び声が聞こえる。  
その声は分かりやすく移動していた。

「今日も精が出るな、二百円兄貴」

「頑張れよ、二千万兄貴」

「うるせー！その呼び方やめろつての!!」

厳ついあんちやんたちにからかわれながらも、速度を落とさず作業  
を続ける。

全力で雑巾掛けをする少年は近衛刀太。

彼はこの旅館で二千万の借金を背負い、時給二百円で働いているU  
Qホルダーのナンバーズである。

UQホルダーとは雪姫という名の吸血鬼が組織した不死人で構成  
されたファミリー。鬼男や猫娘を始めとする、人の世を外れた者達の  
互助組織。人の理を外れた人間以外の徒党であるため、常に人の世か  
らはじき出され蹂躪され、忘れられる者達、つまりは少数派・弱者の  
の側に付き、カタギには被害を及ぼさないことをモットーとしてい  
る。

簡単に言えば、人外によるお助け組織である。

新東京の沖合10kmにある温泉宿の「仙境館」は彼らのアジトだ。  
そこを法外な激安時給で掃除する刀太は下つ端にしか見えないが、  
その実UQホルダーの幹部である不死身衆の一人。

UQホルダーの多くは百鬼夜行の亜人たち。並みの生き物に比べ

れば大分頑丈という程度でしかない。

その中でナンバーズはその不死身度が高い者たちを指す。不老不死の吸血鬼をはじめとして、不死性を有する神魔妖怪、神酒・靈薬・賢者の石などの不死のグッズの使用者、電腦化・ロボット化などの科学的不死者、命のストック（残機）をもつ者、死なない呪いがかかった者、死ぬと転生するセーブポイントを設置している者、人体改造をしている者など、数多くの不死人が所属する。

刀太や、一緒にやつて来た時坂九郎丸、その後にスカウトされた佐々木三太はほんの少し前に入った新人だ。

特に刀太はナンバーズの中では実力不足。雑務を任されるのも当然と言えた。

「やあ、刀太さん。今日もお疲れ様です」  
「おう！サンキューな。……って、誰？」

そこに声を掛ける少年が一人。

見た目は十六、七歳。スース姿なのを見るとナンバーズではなさそうだが、珍しい。

というのも、大体の構成員は強面のおっさんばかりでヤの付くとんでも業にしか見えないのだ。子供の姿をした者もいるが、スースは着ていらない。故に珍しいのだ。

「これは失礼。僕は靄傘黒斗もやかさくろと、末端の組員です」

「そつか、俺は近衛刀太だ。よろしくな」

刀太が握手しようと手を差し出すが、黒斗は握ろうとせずに仰々しくお辞儀する。

「こちらこそ、以後お見知りおきを」  
「？ほら、なら握手しようぜ。友達の証だ」

友好的な、というより素で言っている刀太に首を横に振る。

「いえいえ、それには及びません。自分のような末端にはそのような行為は出来ません」

「いーから、ほら！」

黒斗の言葉に耳を傾けず、強引に掴みに掛かる。  
すかつ。

「あれ？」

黒斗は掴まれそうになつた手をひよい、と上に挙げる。  
しかも、ものすごく意地悪な顔をしながら。

「このー！そらー！今度こそつ！」

ひよい。すかつ。ひらり。

何度挑戦しても簡単に躱されてしまう。

「ああもう！なんで避けんだよ!?」

「それは当然。僕は友達が欲しいと思つてませんから」  
その言葉を刀太は信じられないと目を丸くする。

「いやいやいや、んな寂しいこと言うなよ」

「そう言われても……」

本気で困った顔をする黒斗に刀太は決意する。

「よし、決めた！絶対お前を俺の友達にする！」

高らかに宣言する。

「絶対だかんな！」

「やめてください、お願ひします」

そんな宣言に返ってきたのは、まさかの全力土下座。

しかも、ゴツ！とか音がするくらいの勢いでのジャンピング土下座

だった。

「そんなに嫌かよ！」

「刀太君、何してるんだい？」

コントみたいなやり取りをしていると、横から声が掛かる。

「よお、九郎丸。ちよつと聞いてくれよ」

美少女にしか見えない、長い黒髪をサイドテールにしているイケメンが現れた。

彼（？）の名前は時坂九郎丸。彼もまたUQホルダーのナンバーズの一人である。

「なあ？ひどいだろ？」

事情を説明された九郎丸は難しい顔をする。

「ううん、でもいきなり幹部に話しかけられたら身構えてしまうのではないかな？」

そう言うが、九郎丸も変には思っている。

何をそんなに刀太に対し警戒しているのだろうか、と。  
はつきり言つて、刀太は馴染みやすい。

自分が彼らを標的とする不死狩りだと分かつても、強引に友達にしてしまう。そこには、打算や計算はない。

ただ、友達になりたいだけ。

それがしつかり伝わる。そして基本誰とでも仲良くなれるのが、この近衛刀太という少年である。

それをここまで全力で拒否するということは、何かしらの理由があるのかも知れない。

「まあまあ刀太君、嫌がつてるのに無理矢理はよくない」

とりあえず九郎丸は、刀太を落ち着かせることにする。

「それと、黒斗さん……だつたかな？ 刀太君はこれでも本気だから、そ  
う警戒することもないよ」

やんわり言つたつもりだが、全力で首を横に振る黒斗。

「いやいや！ 自分のようなカスにはそんな恐れ多い——」

「お前、あんまりそういうこと言うなよ」

自分を卑下する黒斗を刀太は遮る。

「俺だつて何にも持つてないけどさ、それでもこうして全力で生きてい  
る。だから、あんまり自分のこと悪く言うなよ」

希望溢れる力強いその言葉に、黒斗の表情が消え——

「あなたたち、何をしてるの？」

そこに、新たな声が掛かる。

「！ 夏凜先輩」

「どうしたんですか？ 夏凜殿」

日本刀とハンマーを持った、どこぞの学校の制服を着たショート  
カットの女の子——UQ ホルダーナンバーズの一人、結城夏凜だつ  
た。

自分達に用があるのか、と聞いた九郎丸に首を横に振ることで答える。

「用があるのはあなたよ」

指を指した相手は、黒斗だった。

## 仕事場へゴー

昔、地獄の中に居た。

傷付けられなくとも痛みを感じる拷問地獄に。

その地獄から救い出してくれた人は戻つてきてくれた。

だが、その後自分を支えてくれた人は。

どうしようもなく落ちぶれていた。

.....

「あなたに仕事が来ています」

夏凜が黒斗へと告げて、仕事内容が書かれた紙を渡す。

「お、久しぶりだな。夏凜？」

刀太たちには敬語だつたにも関わらず、何故かそれよりも上の立場である夏凜にはタメ口で呼び捨て。

九郎丸の頭には疑問符が浮かぶ。

「ええ……そうね」

一瞬悲しそうな顔をした夏凜。すぐに踵を返そうとして、

「なあ、どんな仕事？」

刀太が割り込んできた。

「大したことの無い内容ですよ」

「それに、あなたには向いてないわ」

露骨にはぐらかされて地団太を踏む刀太。

「ええ！教えてくれよ!!」

「それでは、行ってきます」

「……逝つてらっしゃい」

刀太を無視して仕事に向かおうとする黒斗と送り出す夏凜。

「いや、少し待て」

だが、それを遮る者がいた。

「雪姫様！」

「雪姫！」

長身で白金の長髪と碧眼を持つナイスバディの女性がそこに立っていた。

「……何の用だ？ エヴァンジエリン」

「？」

不機嫌そうなのを隠そうともせずに雪姫の本名を呼んだ黒斗に驚く刀太と九郎丸。

雪姫の本名を呼び、夏凜と対等のように接し、なのに自分たち新米には低頭の姿勢。

一気に黒斗という人物が分からなくなってしまった。

「まあ、そう凄むな。なに、ちょっとした新人研修というやつだ」

少し大きさに手を広げて、雪姫は告げる。

「そこの新米一人と、佐々木三太の三人をお前の仕事に連れて行つてやつてくれないか？」

「断る」

組織のトップからの指示を即答で切り捨てる。

「理由は？」

「仕事の成功率が著しく下がるからだ」

「なに、その心配には及ばん。存外、素直な奴らだよ」

正当な黒斗の言い分を、さらに即座に切り捨てる雪姫。

「お前はどう思う？ 夏凜」

今度は夏凜に質問する黒斗。

「まあ、大丈夫かと」

その返答にすこし悩んでから、

「……分かつた。他に興味のある奴がいたら十五分後までに連れて来てほしい」

それじやあ、と言つて船着場へと向かう。温泉宿「仙境館」は新東

京の沖合いに立っているため、宿の外へは船を使う必要があるのだ。

「よつしや！九郎丸、三太呼んでこようぜ！」

「う、うん」

手を掴んで引っ張っていく刀太に少し顔を赤くしながら着いていく九郎丸。

「……どういうつもりですか？雪姫様」

いつもなら、そんな九郎丸の様子を見て女の子化ルートに行きやすくなつたと密かに喜ぶところだが、そんなことより重要なことがある。

「あの黒斗に他人を同伴、しかも近衛刀太を」

大丈夫、と言つたがそれは雪姫がゴーサインを出しているから賛同しただけであり、仕事の成功率で考えれば確かに黒斗一人に行かせたほうが断然いいに決まっている。なのにわざわざ、直情的な刀太を連れて行けと言つた。理由があるのだろうが、夏凜には思い浮かばない。

「まあ、ちょっとな」

少し言葉を濁しつつ、遠くを見つめるような目をする。

「それより、お前はついて行かないのか？」

楽しそうに言う雪姫に、雪姫一直線の夏凜には珍しく、ため息混じりに返す。

「ご冗談を、おつしやらないでください……」

「そう、か」

それきり二人は、言葉を交わさず仕事に戻つていった。

——十五分後。

船着場で待つていると、やつてくる四人の姿があつた。

刀太、九郎丸の二人の他。

フードを被つた少年と、めがねを掛けた三つ編みツインテの少女だ。

少年の名前は佐々木三太。ついこの間一番新しく入った幽鬼の少年。最高の死靈術士の手で出来た力を持つ幽靈である。ちなみに幽靈だが実体はちゃんとある。

そして少女は桜雨キリエ。UQホルダーの最大出資者でもある少女。一見か弱そうな少女だが、設定しておいたセーブポイントに死んだら生き返るという「リセット&リスタートOKな人生」の固有能力を持つている。黒斗はたまたま知っているが、キリエはこの能力を隠して予知能力とすることにしている。

「お待たせ、黒斗」

「はい、それでは行きましょうか」

着いたのを確認して船へ先導する黒斗。

「ん~、なあ黒斗。敬語やめねえ?」

船に乗る前に若干困った顔をして刀太がお願ひしてきた。

「……」

「ほら、僕達の先輩相手にはタメ口だつたりすると僕らもどう接していいのか困るから」

渋つていると九郎丸が助け舟を出す。

確かにこれから仕事をするのに無駄にギクシャクしててもあまりよくないだろう。

「……わかった」

頷いた黒斗に気をよくして飛び乗る刀太。

「こら、刀太! 危ないじやない!」

少し船が揺れたので注意するキリエ。

全く、と呟きながら他の面々と一緒に乗っていく。

(まあ、大丈夫だと思うけど念のため)

保険としてセーブポイントを作る。

「それじゃあ、出発!!」

刀太の掛け声で、仕事場へと船を動かす。

船を発進させてから十分ほどして、操縦していた黒斗に刀太たちが話しかける。

「黒斗？ 黒斗先輩？」

先ほどは呼び捨てだつたが黒斗の立場がよく分からなくて、呼び方に迷っているらしい。

「黒斗でいい」

「んじゃ、黒斗。今日の仕事つて俺たち何すりやいいんだ？」

氣さくに呼びかけたと思ったが、内容は真面目。仕事には真剣に取り組もうというやる気を感じさせた。

「いや、何もしなくていい。お前たちは自分の身が危険になつた時に自分たちだけを守ればいい。決して攻勢に出るな」

だが、言われた内容は働くことを禁止するという意外すぎる内容だつた。

「ちよつと！ それおかしくない!? 雪姫はあんたの仕事を手伝いに来させたんでしょ？ ならなんで役割が手を出すな、なのよ！」

キリエが言つたことは何も間違つていない。

新人研修とはいえ、ただ見てるだけではあまり収穫が少ない。並の連れならまだしもここにいるのは人外たちの中でも充分に実力を持つた者たちなのだ。

頼りになるし、するべきだろう。

「駄目だ。むしろ実力があるからこそ、だよ」

「どういうことよ？」

純粹に疑問符が浮かぶ面々。

「着いてがらのお楽しみだ」

少し、意地悪な顔で正面に視線を戻す。

「なあ、黒斗、さん？ 黒斗兄ちゃん？」

今度は三太が質問する。

「好きに呼びな」

「黒斗兄ちゃん、結局何の仕事？」

言われて、言つてなかつたなど思い、簡潔に答える。

「今日の、といふかお……僕が基本担当してるのは『除霊』だよ」

## お仕事ナウ～ホラーナ教会にて～

億や京では足元にも及ばない、ただのくだらん塵芥ども。取るに足らないはずの下等存在ですらなかつたそれに。意味があるのか分からないます。いつしか手を差し伸べていた。

「そら、着いたぞ」

船を降りて歩くこと一時間。

ようやく目的地に到着。

「はあ、やつと着いたのね……」

体力のないキリエは肩で息をしていた。それも仕方ないだろう。彼女は戦闘において、策を弄して勝つための環境を作るのが仕事だ。環境作りをするのに、彼女のやり直しの能力はこれ以上なく最強なのである。

「それにも……」

黒斗についてきた四人が、仕事場の建物を見る。

焼け爛れて朽ちた教会。

仕事内容は除霊。

もう完全にホラー映画か何かだ。

しかも、先輩について行く新人たちという構図。

フラグしか感じない。

ぶつちやけ率先不安だつた。

「へえ～、何かすげえ雰囲気あるな！俺、ホラー映画でこんなの見たことがあった！」

一人だけテンション高く突入しようとする輩がいる。

「刀太君、君はいつもと変わらないね」

呆れるように、関心するように呟く九郎丸。

「え？・だつて映画の中にいるみたいで楽しそうじゃん！」

その返答には、もはや色々通り越して流石としか言いようがない。

「ホラー映画、か。言われてみればそれらしい」

その考えには至らなかつたと目を丸くする黒斗。

「刀太。仕事が終わつたらその映画のこと、教えてくれるか？」

「おう！・もちろんいいぜ！」

笑顔で答える刀太。

「それじや、入るぞ。だが、さつきも言つたが手を出すな。出来れば、  
ずっとお……僕の後ろにいればいい」

指示に若干不満そうにしながらも反対はしない。

「しかし、あなたが危機的状況になつたらどうすればいい？」

「大丈夫だ。今日の相手は低級しかいない」

九郎丸の質問に、余裕に答えて教会の中へ。

皆もそれに続いた。

「けほつ、けほつ……ホコリがひどいわね」

「どうも焼けたまま放置されたようだ。確かに酷いね」

キリエの文句に九郎丸が分析する。

「ふ、雰囲気あるな……」

「ん？ 何だ三太、怖いのか？」

「こ、怖くない！」

刀太が心配するのを跳ね除ける三太だが、強がつているようにしか見えない。

（幽霊なのにホラーが駄目なのか……）

刀太と三太以外の三人が同じことを考えていると、黒斗が立ち止まる。

「よし、全員ここで待機。お……僕の仕事を見学していくくれ

そう言つて、教会の奥へ行く。

「やあやあ地縛霊殿。ご機嫌麗しゆう」

大仰に手を広げながらお辞儀をする。まるで貴族の挨拶のように。

「ふん、何用だ？」

不機嫌そうに答えたのは、偉そうに空中に座るおっさんだつた。  
多少の力がある怨霊みたいだが、どう見ても雑魚。戦闘に不慣れな  
キリエでさえ、魔法アプリを使えば簡単に倒せそうだ。

（なんで、このレベルの低級霊相手に手出し禁止なの？）

純粹に意図が読めなくて混乱するキリエ。

だが、手出し禁止なので大人しく見守る。

「いえ、もしあなたが今までの全てを反省し、死後の全部を元通りにするなら、あなたの地縛を解いて差し上げましょうと思いましてね」

その発言に全員が驚いた。

てっきり、戦闘で怨霊を祓うものだとばかり思っていたが、むしろこの怨霊を助けるものだったからだ。

「はつ、その必要はない。何年掛かろうとも自力でこの程度の地縛など解いてくれる」

だが、怨霊はその申し出を一蹴する。

この程度、などとは言うが地縛霊とはその土地に縛られるから存在出来ると言つても過言ではない。それを解くにはそれなり以上の力が必要だ。

この怨霊は雑魚でしかない。

それが、力を持つようになるためには百年、いや千年単位の時間がいるだろう。

「では、現状を変えるつもりはないと？」

「当たり前だ。むしろ——」

答えて構える怨霊。

「貴様からも力を奪つてやる!!」

そのまま襲いかかってきた！

「ぬううううりやあああああ!!!」

靈的な鎖を何本も黒斗に叩きつける。

ドツ！ゴシヤアア……！

黒斗が軽やかに避け、側にあつた椅子に当たつて砕け散つた。

脆かつたのもあるのだろうが、雑魚にしては予想以上にレベルが高い。

「黒斗！」

心配して刀太が呼ぶが、黒斗は意に介さず怨靈を睨む。

「了解だ。碌な死に方させてやらねえ」

黒斗が手をかざすと、黒い靄が集まり形を成す。

((?))

その靄に一瞬変な気配を感じて、違和感に首をひねる四人。

『黒針』  
くろばり

唱えると、十本ほどの大きめの針が鎖を弾きながら怨靈に突き刺さる。

「ちつ、くそが！」

だが、刺さったまま鎖を振るう。大したダメージになつていないようだ。

それを見た面々の反応・感想は一つ。

((弱すぎないか!?)

もしかして、自分の仕事を取られるのが嫌で待機させたのか、と若干失礼な考えが浮かぶ。

そんなことを考えている間も、針と鎖の攻防は続く。

針は鎖を弾き、怨靈は強引に動いてギリギリ針を躰す。

そんな地味な戦闘が五分以上も過ぎたころ、

「ちよつとあんた！さすがにまどろっこしすぎるんじゃない!?」

いい加減我慢の限界なのか、キリエが怒鳴る。

「いいから、黙つて見てろ」

しかし、指示は待機。

いくら仕事を頼まれたからといって、事実上の上司であるナンバー<sup>ズ</sup>の自分たちにこの態度。

「もう我慢ならないわ……刀太！九郎丸！やつちやいなさい！」

さつさと終わらせてほしいので、一人に突撃指示を出す。

二人も、早めに終わるならいいか、と動こうとするが、

「兄ちゃんたち、ちよつとタンマ！」

それを三太が止める。

「どうしたんだい？三太君」

止める理由が分からず問う九郎丸。

「皆、あの怨霊の後ろ……よく見てみろよ」

指を指した方向に目を凝らす。

すると、怨霊の腰の後ろに大量の細い鎖が繋がっていた。その先に。

数えきれないほどの低級霊が苦しんでいた。

「!?

「な、なによ……あれ」

雑魚にすら満たない弱弱しい低級霊しかいないが、これだけ集まつていればおぞましい。

「！・そうか、そういうことか」

何かに気付いたのか、九郎丸が手をポン、と叩く。

「どういうことだよ？九郎丸」

「彼らはおそらく、あの怨霊の被害者だ」

「?」

言われてもよく分からぬ刀太は説明を求める。

九郎丸が言うには、あの怨霊はてんで雑魚だが他の霊を捕まえてそのエネルギーを吸収できるらしい。

後ろに繫がれた低級霊たちは今もなお、現在進行形で力を奪われ続けているのだと言う。

「んじゃ、早く助けねえと！」

「ダメよ！あんたが全力で攻撃したら、その余波だけで何体か消えるわ！」

それを言われたら、刀太は動けない。

(なるほど……手を出すなつて、こうのことだつたのね)

今ようやく納得した、と頷く。

だが、納得したからと動けないのは変わらない。

四人は構えることすらやめて、黒斗の戦いを見る。

ガキイイン！

もう何度も目が分からぬ、針が鎖を弾く音が響く。

「つそが！いい加減にしろ、雑魚が！」

着かない決着に嫌気が差した怨靈が怒鳴る。

「何本当たつたところで、てめえの針なんざ痛かないんだよ！」

聞いた黒斗は動きを止める。

その顔は攻撃が効かなくて悔しそうに歪んで――  
なんてことは欠片もなくむしろ、何言つてんだこいつ、というものが  
だつた。

「?」

その表情に警戒を深める。

「はあ、なんだよ。そんなにさつさと苦しみたいのかよ」「  
こちらをいつでも殺せる、という言い方にブチギレる。

「ふざ――！」

『黒針 煮式』

黒斗が指を鳴らした瞬間。

灼熱に囲まれたかのような熱さと激痛が怨靈を襲つた。

「ぎやああああああああああああああ!!」

まるで、熱湯に茹でられているかのような感覚。

痛みと辛うじて怒りがあるだけで、それ以外の全てが頭から吹つ飛  
んだ。

『行くよ 黒頸』

今度は、手に靄が集まつたと思つたら鰐のような頸が現れた。  
その頸に、四人はゾクツとする。

強大な力を感じるわけではない。

ただ、嫌な感じが拭えない。

しかもその感覚に何故か覚えがあるのだから四人の疑問符は増え  
る。

(黒斗つて何者なんだろ？)

その疑問に答えはなく、戦闘は佳境に入る。

「がああああああ！つそがああ！」

僅かに残つた怒りを振り絞つて黒斗を攻撃する。  
その全てを避け続けながら怨靈に接近していく。

「来るなああああああああ！」

もう目前にいる黒斗を遠ざけようと、全ての鎖を横に薙ぐ。  
黒斗に当たりそうになる直前で、その姿が消える。

「!?

混乱した一瞬で、後ろ側に気配を感じた。

怨靈が振り向く前に黒斗がその顎で腰の鎖を噛み千切る。  
パキイ！という音と共に鎖が粉々になる。

「ふざけんなああ！殺つすうううう！」

低級<sup>エ</sup><sub>サ</sub>怨靈を解放されて、痛みを怒りが凌駕。鎖を束ねた極太の鎖を黒斗に叩きつける。

「死ねええええ！」

その声を聞いた黒斗が一瞬、自嘲氣味に笑う。  
すぐに怨靈を睨みなおし、腕を前へ向ける。

『喰い尽くせ  
闇顎』

黒斗の身長の数倍にもなる大きさの龍の顎が鎖ごと怨靈を飲み込む。

「ひっ！」

怨靈の最期は断末魔ですらなく、小さな悲鳴に消えた。  
完全に怨靈を食べ終えた黒斗は、ふう、と息を吐き、

「ま、こんなもんか」

と、肩の力を抜いた。

## 飯は基本先輩の奢りという法則

……

生まれた時には自分が分からなかつた。  
他のものとなんら遜色のない存在だと思つていた。  
だから自分の正体を知つた時に頼んだのだ。  
自分を、殺すではなく消してくれと。

……

怨霊を倒し、軽くなる教会の雰囲気。

「はあ、やつと終わつたのね」

時間にしてアジトから数時間も掛かっていないが、長く感じられた。

「早く帰りましょ」

「おい、仕事はこれからだぞ？」

「え？」

黒斗の言葉に固まる四人。

いや、だつて、どう見てもこれで終わりつて感じだつたじやん、と言いたげな顔に黒斗はため息で返す。

「言つただろ？おれ……僕の仕事は除霊だつて」

「先の自縛霊のことじやないのかい？」

「そんじやあ、こいつらどうするつもりだよ？」

言われて見た先には、先ほどの怨霊に力を搾取され続けた靈魂がいた。

「でも、こいつら……」

幽鬼である三太は即座に理解したのだろう。

元々があまり力を持つていない浮遊霊。それが力を奪われ続けたのだ。

彼らはもう、消えてしまう。

「だけどよ。それじゃあこいつら、報われないだろ？」

悲しそうに、どこか羨ましそうに彼らを見やる黒斗。

『もうよいのです……』

すると、老人の幽霊が代表して語りかけてきた。

『あなた様は私どもを真剣に助けてくださった。それだけで、もう充分です』

心からの感謝の念がはつきり伝わる。

全ては本音なのだろう。

「駄目だ。あんたたちを助けたところで救えなければ意味がない」

だが、その心遣いを断固拒否する。

「でも、どうすんだよ？ 黒斗。時間ないんだろ？」

刀太の質問に、笑顔で返す。

「確かに出来ることは限られてる。だから——」

ニッ、と付き添いの四人に言う。

「こいつらの話を聞く。お前たちにも手伝つてもらうからな」

こうして、幽霊たちの最期の言葉を聞いていくという大相談会が始まった。

『本当に、ありがとうございました』

「いや、そんなに何度も言わなくてもちやんと伝わってるから……」

『何をおっしゃますか！ 言葉を尽くしても伝わりきらぬこの感謝、まだまだ味わつてもらいますぞ』

「ああもう！ 最初の諦めムードどこいったんだよ！？」

『兄ちゃん、遊んで！』

「よつしや、じやあ鬼ごっこでもするか？』

『やつたー！』

「そら、俺が鬼だぞ。逃げろよー」

『わーい！』

『私も生前の若い頃はあなたみたいに綺麗でね。モテたものよー』

「あの、僕はその……男なんですけど」

『あらま！こりやまたべっぴんさんだこと。生きてたらうちの息子の女房にしたかつたなあ』

「いえ、ですから僕は……」

「で、今のゲームはこうなつててな。ほら、これがぼくの動画」

『すつげえ！かつけえ！』

「そ、そうか？へへつ」

『ゲへへ、お嬢ちゃん可愛いね』

『グへへ、いいね、いいよ』

『デュフ、萌えるでござる』

「なんであたしのところだけ変態しか来ないのよー！刀太、ちょっと助けなさいよ！」

そんなこんなでお祭り騒ぎのように時間は過ぎていった。

『そろそろ、時間のようですね……』

『そう言つて、白い光の玉を黒斗に差し出す。

『これは我々の残つた力です。せめて、あなた様の糧に』

おそらく、相談中にこつこつ集めていたのだろう。微々たる物でしかないが、そこには確かに想いがある。

その想いを受け取つた。

「ありがとな。こいつは俺の力を増やして、そんでもつて」

色んな感情の詰まつた複雑そうな顔をして、告げる。

「あんたたちの綺麗な魂はきつと、俺を少しだけ祓つてくれるだろう」

その言葉を最期に、靈魂たちは全て消え去つた。

いや、きっと成仏したのだろう。

「……さ、仕事は終わりだ。帰るぞ」

振り返つて教会を出る。

外に出ると、もうすっかり暗くなつていた。

「ああ、腹減つた」

「そうだね、僕もだ」

「あたしは疲れたから早く寝たいわ」

その様子を見て、黒斗は提案する。

「んじゃ、飯でも行くか？奢るぞ」

「え？ マジで？」

「ああ、高級店じゃないが味は天下一品だ」

「でもいいんですか？」

「仕事の手伝い、あれ結構助かったからな。そのお礼だ。給料もそこそこ出してもらえるようにしとく」

「マジか!? サンキュー、黒斗！」

「アホらし、あたしは帰つて寝たいんだけど？」

「いいのか？ そこにはアジトにも負けないくらい美味しいデザートもあるぜ？」

「しょ、しようがないわね。大人しく奢られてあげるわ」

「なあ、黒斗兄ちゃんあとどれくらいで着く？」

「もう目の前だ」

そこは、新東京の一角とは思えないズタボロさだつた。

店の前の通りや隣は綺麗なのに、何故かそこだけ貧困街かのようないや、まさか、と思つたまま黒斗を見やると、迷い無くボロ店に入つていつた。

「よおっす、強面親父。適当に美味しい飯とデザート五人分、よろしく」「ああ？ 誰が強面だ？ てめえ以外の四人には飯出してやるよ、さっさと座れ」

中に入ると、アジトにいる強面の構成員が可愛く見えるほど厳つい顔をしたおっさんが鍋を振るつていた。

「あ、こら父ちゃん。またそうやつて黒斗さんに意地悪するんだから。ちゃんと作つてやんなよ」

すると店の奥から娘らしき人が来て注意する。

チツ、と舌打ちしてから料理作りに集中し始めた。

「まつ、態度は悪いが味は問題ねえから心配すんな」

そう言つてテーブル席に皆を座らせる。

「黒斗殿、いつもこんなやり取りを？」

「ああ、一応常連なんでな」

「いや、常連客だからってあんな態度の必要はないかと思うんだけど」「つていうか、そんなに何度も来てるの？」

「大体仕事で近くに来た時はいつも来てくださいますよ」  
適当に話していたら店主の娘が話しに混ざってきた。

「へえ、でもわざわざここへ？」

「見つけたのはたまたまだが、入つてみたら当たりだつたからな。そういうお気に入りつて使い続けたくないか？」

「ああ、わかる気がする」

「そういうや、刀太が静かだけどどうした？」

多少の盛り上がりを見せる中で、珍しく一言も話さない刀太に目を向けると、そこにいなかつた。

「おお！ おっちゃんすげえな！」

「ガキは引っ込んでろ」

「ガキじやねえよ！ でもそつか、そうすりやいいのか……」

「なんでえ、分かるのか？」

「友達ほどじやねえけど俺も料理できるからな」

「そうかよ」

「なあ、おっちゃん！ 僕に料理教えてくれよ」

「…………今度時間があつたらやつてやる」

「サンキュー！」

気が付いたら店長と仲良くなつていた。

「いつも思うけど、刀太君のあれはすごいね」

「あたしもあれは真似できないわ」

関心したり、また別の話題で盛り上がりつて十数分後。

「そらよ。大サービスでめえにも作つてやつたぞ、クソ常連。泣いて感謝しろ」

そんな悪態と共に、料理が出てくる。

刀太と三太は中華、九郎丸と黒斗は和食、キリエには洋食のそれぞれ定食が振る舞われた。

「！ めっちゃうめえ！ 何これ！？」

「本当ね。美味しい」

「味は一流だね」

皆日々に料理を褒める。

凄い勢いで箸は進み、三十分と経たずデザートを食べ終えた。

今は、食後のお茶を飲んでまつたりの最中である。

「はあく、美味しかったわね」

「来て良かつただろ?」

黒斗の言葉に頷くキリエ。他の面々も満足のようだ。

「そういうや、あんたは何者なの?」

唐突にキリエが質問する。

「何者つて言われてもな……」

いきなりの質問に戸惑う黒斗。

「だつて、あの黒い靄とか何なのよ?」

「確かに僕もそれは気になつたかな」

九郎丸も加わり、困った顔をする。

「ん~、そうだな……」

何て言おうかと悩む黒斗。

あんまり氣にしてない刀太は助け船を出そうかと思つたが、その前に黒斗が口を開く。

「強いて言うなら俺は、夏凜の天敵で、三太の……いや、どつちかつて言うと水無瀬小夜子の、かな」

水無瀬小夜子の名前にピクリと反応する三太。

それも当然だろう。

なんせ彼女は三太を生み出した最高位のネクロマンサーなのだ。そして、刀太に三太を託した人物でもある。三太は彼女の友達だったのだ。

そんな三太の様子には気にかけず、納得するように頷く。

「うん。俺は彼女の、超下位存在つてところだな」

意味の分からぬ皆に対して、満足そうな顔で立ち上がる黒斗。

「解答は終わりだ。帰るぞ」

そう言つて、お金を店の娘に渡して出て行つた。

## 報告と対策～きな臭い事案編～

窓から覗く景色。

明るかつたり笑顔だつたり。

希望という言葉がピッタリ当てはまる風景に。

嫌悪しか感じられない自分を憎む。

翌日の早朝。

黒斗は、報告のために雪姫の部屋へと向かっていた。のはいいのだが、

「何でお前たちも一緒になんだ？」

黒斗の後ろには昨日仕事の見学をした四人がいた。  
「知らないわよ。ただ、この時間に自分の部屋に来てくれって言われたのよ」

黒斗の質問にキリエが答える。

他の者たちの頷いてる様子を見て、同じようなことを言われたのだろう。黒斗と同じく。

「黒斗はどうしてだ？」

「俺は昨日の仕事の報告に行くんだよ。昨日のうちでもよかつたのに、何でかこの時間を指定されてな」

刀太の質問にはつきり嫌そうに答える。どうも黒斗は雪姫のことが嫌いらしい。

雪姫を慕っている刀太にとつてはそのことは純粹に疑問だ。

「なあ黒斗、雪姫のことどう思ってるんだ？」

「大嫌いだ」

即答。

それ以外に聞くな、と言外に言つてゐるようなきつぱりした言い方だつた。

それから沈黙が続いてゐる間に目的地に到達する。

「入るぞ」

扉を開けて全員を中に入れる。

「女の部屋に入るのにノックぐらいはしろ」

「俺らにそんな気遣いが、無用どころか無意味なことくらいわかつてんだろう？ エヴァンジエリン」

「一応、今は雪姫なんだがな……」

何もせずに入つた黒斗に注意するが、本人は何処吹く風だ。

「ん？ それより黒斗、あのわざとらしい言葉遣いはやめたのか？」

「……別に、面倒になつただけだ」

ふい、と顔を逸らす黒斗にニヤニヤとした笑みを浮かべる雪姫。その顔にイラツとしたのでさつきと用件を済ませることにした。

「とにかく、昨日の報告だ」

若干強めの口調で昨日の仕事の内容を全て話す。

「——つづうわけで、この四人にもそれなりの給与は頼むわ」「分かった。よからう」

仕事を手伝つた報酬の話も忘れずにして終了。

「つてか、こんだけなら、いつら一緒にきせる必要ないだろ？」

黒斗の疑問はもつともだが、雪姫はその目を鋭く光らせる。

「それだけならな」

「あ？」

雪姫の言葉により不機嫌な顔をする黒斗。

「で、どう思つた？」

「……なにがだ？」

おそらく自分の考え方を見抜いている雪姫に、諦めながらも小さく抵抗する。

「不可解だつただろう？」

他の四人が何のことか分からず首を傾げる中、黒斗は完全に諦めた。

「わあつたよ。……つたく、それを聞かせるためにわざわざこいつら呼んだのか？」

「よく分かつてるじゃないか」

大きくため息を吐いてから説明を始める。

「一言で言えば、きな臭え」

雪姫は頷いて説明の続きを促す。

「そもそもあんな雑魚怨霊がまともに戦うだけの力を持つていたことがおかしい」

結局は雑魚でしかなかつたが、それでも力を持つていたことが有り得ない事態なのだ。

生前高い魔力を有していたなどのことでもない限り、自縛霊には力なんて欠片もないのが当たり前である。

「すなわち、誰かがあの怨霊に力を与えた可能性が高いってことだ」

ならば、その力は誰かに貰つたものだという線が濃厚だ。

それだけならば大したことはないのだが、

「なにより、雑魚怨霊相手で考えりや破格の力を与えたのに、それをこのアジトの近くに置き去りにしたのが解せない」

そう、何もすぐにUHQホルダーに目を付けられるようなところで行動を起こし、様子を見に来るでも遠くから眺めるでもない。

行動が理解不能なのだ。

故に不可解。

「どう見る？」

そこまでは雪姫も同じ意見なのか、さらに先を促す。

ちなみに、既に刀太と三太は話に着いていけていない。

「考えられんのは実験と挑発。片方か、両方が、正解かどうかも知らんがな」

実験の予測としては、怨霊に成長させる力を与えて自身の成長のシミュレーターとして使つたのかもしれないというところ。

挑発はわざわざUHQホルダー近くで事を起こしたことを見みてだ。

「実験ならばまだいい……いや、よくはないが」

言葉を受けて少し悩む雪姫。

「じゃあ聞くが、誰への挑発だと思う？」

雪姫の質問を受けてさらに悩む黒斗。

「ぱつと見て考えりやヒQホルダーだが……個人の可能性を考えると……」

「黒斗殿への挑発、ですか？」

少し言いよどむ黒斗。その考えを理解したのか九郎丸が続きを答える。

「どういうことだよ？」

もはや話に置き去りの刀太が聞く。

「簡単よ。ああいう除霊はこいつの担当だつて知つて昨日みたいなことをやつた可能性があるつてことよ」

同じく話を理解していたキリエが代わりに答える。

「そういうこつた。……んで、どうする？」

「取り敢えずは、お前に一任する」

今後の対応を聞いた黒斗は、予想通りの言葉に頷こうとして、「ただ、何かある時はそこの四人も連れて行け。何かと役には立つだろう」

その言葉に動きを止めた。

「おいこら、昨日は温かつたからまだいいがな。危険度が上がりやあこいつらにまで手え回せねえぞ？」

「その辺は心配しなくても大丈夫だろう。全員、伊達にナンバーズではないよ」

雪姫の言葉に悩んでいると、扉がノックされて開く。

「雪姫様、お茶をお持ち…………」

入ってきた夏凜が固まる。

その視線は黒斗に注がれていた。

「おいエヴァンジエリン、これはどういうこつたあ？」

対して黒斗は、額に青筋を立てて雪姫に迫る。

「何のことだ？」

それを見てニヤニヤした笑みを浮かべるエヴァンジエリン。

「ふざけんな！俺と夏凜が連日顔を合わせるなんざ、てめえが仕組ま

ねえとあり得るわけがないだろうが!」

怒る理由が分からぬ四人は置いてけぼりで戸惑い、動けない。

「俺と夏凜は接触するのを禁止されてるんだからよ!」

「え、ええええええええええ!!」

その衝撃の事実には驚かずにはいられなかつた。

何せ接触禁止だ。

昨日の微妙なやり取りで昔からの知り合いだつたのだろうという  
のは分かるが、流石にそんな関係だとは予想外すぎた。

しかも、たかが二日連続で顔を合わせただけでここまで怒るとは、  
普通ではない。

「たまたまだろう? そう怒るな」

「あん?」

しかも、雪姫は白々しく流す。

そして先ほどよりも意地悪な笑顔を浮かべる。

(あ、何か悪いこと考へてる)

二年間共に過ごしてきた刀太はその顔でそれだけ悟り、少しだけ黒  
斗に同情した。

「それと、何かある時は夏凜も連れて行け」

パリン。

雪姫が告げると夏凜が湯呑みを落として割り、

ドゴシャア!!

次の瞬間には、黒斗が闇顎を発動させて雪姫を壁ごと外へ吹っ飛ば  
していた。

「てめえ、ざけたことばっかしやがつて……」

そこには、怒りで顔を歪ませた黒斗が立っていた。

「許さねえ。てめえは三回殺してやるよ」

殺氣を溢れさせて、黒斗は雪姫に飛びかかつていった。

この後きつちり給料から天引きされました

……

奇跡が起こつた。

しかも二度。

だがそれはプラスではなく。

ただ否応無く理不尽に。

地獄という言葉にしか成り得なかつた。

……

いきなり吹つ飛ばされた雪姫の顔には、怒りではなく笑顔が浮かんでいた。

「どうした？未練たらたらじやないか！？」

その言葉に黒斗の顔が苦しそうに歪む。

「黙りやがれ!!」

叫びながら、その手に黒い靄を集めて作つた銀に輝く剣を出現させて斬りかかる。

全力を持つて振るわれたそれを、雪姫は腕の周りに氷で出来たブレードを作つて振ることで対処する。

「その剣を見るのも久しぶりだな？ M<sup>ミス</sup> r. ター. B<sup>ビー</sup>」

「ああ、その名前を捨てた時以来だよ」

言葉を交わしながら、二度三度と切り結んでいく。

数秒後に地面に到着。

お互に少し距離をとる。そこへ、

「てめえ！雪姫に何してんだよ！？」

「刀太君！」

両腕に闇<sup>マギア</sup>の魔法<sup>エレベア</sup>を発動させた刀太が殴りかかつた。

超パワーを發揮する必殺にもなりうる一撃は地面を大きく碎き、

「悪いが、」

しかし、どうやつたのか黒斗は刀太の頭に着地する。  
「もちつとまともに現実見とけ、ガキ」

刀太がその言葉に反応し、吹き飛ばそうと動いた瞬間。  
逆に先ほど自分たちがいた部屋まで飛ばされた。

「おおおおおお!?」

「邪魔すんな。これは俺とエヴァンジエリンの問題だ」

虫けらのように、軽くあしらわれたことにシヨツクを覚えながら、  
黒斗の実力に驚く刀太。

(あいつ、強え!)

「刀太兄ちゃん、大丈夫!?」

三太たちが心配して駆け寄る。

「ああ、何か手加減されたっぽいし。ほとんど怪我もねえ」

悔しそうにする刀太は睨むように戦況を見守る。

ガキン!!

再びぶつかり合う剣。

「ふつ、優しいな」

せめぎ合いの最中に雪姫が笑う。

「ああん?」

その笑顔にとてつもなくイラッとして、剣を叩きつける。

「刀太にその剣、振るわなくてよかつたのか?」

「言つてんだろう、てめえは三回殺すつてなあ!!」

つまり、狙いは雪姫のみ。

何度もぶつけ合いながら、雪姫は決して警戒を解かない。  
黒斗の以前の名前の代名詞である『黒剣・闇斬』。

その特性は、不死者であつても有効なもの。

発動条件は斬撃一つで事足りる。

有効と言えど倒されるわけではないので、受けてもいいか悪いかで  
言えば受けても問題はない。しかし、何としても受けたくない。

それくらい、悍ましい能力なのだ。

「ふんっ!」

故に、剣撃に合わせて魔法攻撃も織り交ぜる。

幾つもの氷の矢は黒斗を討ち取ろうと四方八方から襲いかかる。それを、さらに踏み込むことで躱す。

そこに後ろからさらに氷の矢が飛んでくる。

今度はタイミングを合わせてターン。躱しながら裏拳の要領で横薙ぎに一閃。

雪姫はしやがんでこれを躱す。

「そこだ！」

黒斗が蹴りを放つ。

しかも脚を剣のように変化させて。

それを大きく跳んでまた躱す。

当然、跳躍しながら氷の矢を撃つことも忘れない。

「逃がさねえよ『黒針・惨苦』」

黒斗はこれに、昨日とは比較にならないサイズの針を形成して放つ。

お互いがお互いの攻撃を撃ち落とす中、跳躍した雪姫が地面に降りる。

「捕まえた！『黒くろ薙いばら』！」

だがその瞬間、黒色の薙が雪姫を捕まえる。

「くっ！」

そこから逃れようと、雪姫は薙を凍らせて碎く。

その隙を、逃さない。

「死ね」

雪姫に剣が振るわれようとして、

「止まりなさい！」

夏凜が割り込んだ。

雪姫を斬ろうと踏み込んだのが仇となり、その首に夏凜の刀が添えられる。

「夏凜、止せ！」

雪姫が叫ぶが、夏凜は刀を引かない。

「これ以上雪姫様に剣を向けるなら……」

言つて、少し間が空く。

そして意を決したように睨んで告げる。

「あなたを、殺す」

それを聞いた黒斗がつまらなさそうに剣を引く。

「ならせめて、祓魔刀状態で斬りかかるこつた」

そのまま、自室に戻つていく。

「エヴァンジエルン、てめえを殺すのは夏凜が俺に武器を向けたことに免じて止めてやる」

「言つてろ」

自分が方が上というような黒斗の言い分を鼻で笑つて返す。

「で、受けてくれるのか？」

雪姫の質問に舌打ちする。

「わあつたよ。ただ、危険度が過ぎれば俺はこいつら連れて行かねえぞ」

「お前に任せる」

それは、その辺の判断も含めて黒斗に一任するということ。

面倒くさそうにため息を吐きながら、黒斗は自室に帰つていった。

そうだ、京都へ行こう。

その昔。

霧の男がいて。

街を恐怖に陥れたという話。

その事実が百年も経つ頃には。  
子供を躊躇するお伽話に変わっていた。

自室に戻った瞬間、黒斗は膝をついた。

「はあつ、はあつ、……くそつ！」

悪態をつくが、それで調子が戻るでもない。

（くそ、消費しすぎたな。やっぱ、黒針を全部落とされたのが痛かった  
か。補充しねえとな……それに）  
黒剣。

あれを使つたのは本当に数十年、もしかしたら百年以上前だ。

全盛期の頃とは違い、使用した際の負担はそのまま黒斗を苦しめる。

まだ荒い息を無理矢理整えながら、黒斗は準備する。  
(どこ行くかな……イギリス時代なら迷わなかつたのに)  
キャリーケースに荷物を入れて、さっさと旅立つ。

目指すは日本の古都、京都だ。

ぐちやぐちやになつた部屋を刀太たちも巻き込み六人で片付けて  
いる雪姫。

「……雪姫殿、彼は、黒斗殿は何者なのでしょうか？」

飛び散らかつた資料の整理をしていた九郎丸が、唐突に聞く。

「全く、意味分かんねえよな。いきなり雪姫を攻撃するし、思つてたよ  
り強えし」

「まあ、あれで私より数百年は長生きしているからな」

「そうなの？」と聞く刀太に、確かに生まれたのは日本の平安中期頃だから末期だかと答える。そうなると、黒斗は千年近く生きているということだとだ。

「雪姫殿……彼は、本当に生きているのでしょうか？」

その質問に、雪姫は感心する。

「どういうことだ？ 黒斗が三太みたいな幽霊つてことかよ？」

正しくは幽鬼だけどね、と小さく訂正してから首を横に降る。

「どつちかつて言うと荒御靈あらみたまが近いかな」

でも……と口ごもる。

「言つてみろ」

雪姫が促すと、自信なさ気に答える。

「彼の正体、それは『瘴氣そのもの』……ですか？」

その答えを聞いた雪姫が笑顔になる。それは無言の肯定だ。

「え、でもおかしいじゃない!?」

しかし、キリエは反論する。

「瘴氣は確かに毒だけど、空気中のチリみたいなものなのよ！ 普通じやない存在は確かに瘴氣を放つてるけど、瘴氣そのものってどういうことよ！」

キリエの言い分はもつともで、いくら空気中のチリが集まつたところでそれはチリの集まりで、ゴミ程度でしかない。そんなものが、あれだけの力を持つだなんて、冗談にしかならない。

「普通はな。ただ、あのが生まれたのは奇跡そのものだ。本当に、偶然瘴気が集まつて意思が芽生えた。それが、あいつの正体だ」

空気中のチリが集まつて意思を持つ。

「まあ、だから確かにあいつは正確に言えば生きては——」「生きてます」

生物ではないので、生きてないと言おうとしたところ、夏凜に遮れ

た。

それを見た全員が驚く。

雪姫の言葉に賛同しても、否定するところなど（主に刀太関連の冗談以外）なかつたのだから。

「彼は、生きています」

戸惑う面々の中、雪姫だけが、ふつと笑う。

「そうだな、お前にとつては絶対そうだつたな」

事情を知る雪姫が優しく笑う。

刀太的にはちょっと面白くない。

「どういうことだよ？ 説明してくれよ」

「あなたには関係のことよ」

ピシャリ、と言われて雪姫を見るが、首を横に振られる。

「黒斗や夏凜が言わないなら、私から言えることはない」

その言葉に残念そうにする。

ぶーぶー文句を言いながら手伝いを再開した。

——今日からお前の面倒を見る奴だ。挨拶しておけ。  
——おいら、せめて最低限説明してけ。

「？ 夏凜先輩、どうしたんだよ。手、止まってるぜ？」

言われて、はつとする夏凜。

そのまま静かに作業を再開する。

（ねえ、やつぱり……）

（うん。夏凜殿、様子が変だ）

作業は続けながら、キリエと九郎丸はこそこそ話す。

（もしかして、昔の男、みたいな！？）

（ええ!? でも……そんな）

（だつて、あの夏凜があそこまで取り乱すなんて、そうとしか思えないわ！）

「こら、サボるな」

ゴン！という音が二つほど鳴つて、九郎丸とキリエの頭にたんこぶが出来る。

「あまり男女の仲を誹謗するもんじやないぞ」

その言い方に、じゃあやつぱり！と楽しそうな顔をするキリエにもう一発ゲンコツを食らわせる。

「まあ……色々あつたんだよ。夏凜も、黒斗もな」

少し寂しそうに夏凜を見やる雪姫。

その様子に何も言えなくなってしまう。

話題が途切れ、静かな片付けがその日は続いた。

一方その頃。黒斗が新幹線に乗つて、戦闘の疲れからか寝ていて。

「くすくすくす……もうすぐ、もうすぐあなたを捕まえられる」  
黒斗を遠く、かなりの遠方から新幹線に乗つているその姿を、正確に覗く人影があつた。

「待つていてね。愛しの、私だけの……バーナビー」

愛おしい伴侶を抱くように自分の身体を抱きしめて、人影は消えた。

回り始める歯車の中心にいるのは、果たして誰なのだろうか。

## クエスショントライム～魂のカスについて～

……

最初は渋々だつた。

それが段々と普通になつて。

いつの間にか、楽しくて仕方がなかつた。  
だからもつと、と近付いて。

そうして、全てを壊してしまつた。

……

黒斗が京都に行つてから一週間後。

「はあ、最早久しぶりだな」

黒斗がアジトへ帰宅した。

「んお？」

「あつ」

「黒兄ちゃんなんだ！」

帰つて早々、構成員たちに囮まれてしまつた。

「どうしたんだよ？ 今回は。仕事か？」

「消耗したんでね、休暇だよ休暇」

「黒兄ちゃん、遊んでー！」

「後でな」

「黒斗さん、雪姫様が帰つてきたら自分の部屋に来るようになると」

「分かつた、すぐ行く」

適当に流しながら返事をしていく。

そこでふと、気になつたことを聞いてみた。

「……なあ、夏凜はどうしてる？」

「夏凜様なら今はアマノミハシラ学園都市に行つてますよ」

「んあ?……ああ、そういうやまだ調べる必要があつたんだつけな」

アマノミハシラ学園都市とは旧麻帆良学園であり、つい先日三太を幽鬼にした水無瀬小夜子が世界規模のヴァイオハザードテロを起こしたその中心地でもある。

何でも、なかつたことにしたとはいえ世界が滅ぶほどに用意周到に準備されたテロが行われたのだ。細かい経緯や、繋がつてゐる裏側の調査が必要なのだと言う。

(ま、好都合かもな)

そちらに掛かりきりになつてくれるなら、黒斗に任せられた件に巻き込まずに済む。

そう思いながら、雪姫の部屋に入つた。

「おう、戻つたぞ」

ビュオ!!

入つた瞬間、氷の矢が飛んできた。

「うおおおおお!?

全力で横つ飛びに躲す。

「いきなり何しやがる!?

「黙れ阿呆が。貴様が暴れたせいで処理が遅れた案件がいくつあつたと思つてゐる?」

随分と手間だつたのだろう。それが雪姫のいろいろ具合から見て取れる。

「あ?てめえが俺を挑発しなけりやあんなことにはなんなかつたつづうの」

だが、黒斗としても心外なのである。

普段は別に感情をあらわにしたり、激情に任せてキレて襲い掛けたりなどしないのだ。

その琴線に触れると知つて色々企んだ雪姫が悪い。

二人とも主張は折らず、そのまま双方くだらないぶつかり合いはやめた。

自然とそうなつた二人の取り決め。両方が折れなければ、逆に両方も意見のぶつけ合いをやめる。そうして妥協案を探すのである。

「それで、今回はどうここに行つて来たんだ?」

話を強制的に終わらせて、別の話題に。

「今日は京都、特に嵐山とか霧園気の悪いところについて感じだな」

当然、黒斗もその話題に乗つかる。

「ロンドンに比べりや、と思つてたがあそこもいいな。漂つてるだけで瘴気が充填されてるのがわかる」

「そうか」

満足げに頷く黒斗に簡単に返す雪姫。

近くに寄れば分かるが、黒斗から感じる瘴気は以前よりも遙かに強くなっている。とはいえた存在感などはやっぱり希薄なままなのだが。

「それで? ただ休養しに行つていたわけでもあるまい?」

睨むように雪姫が聞く。

黒斗はこれでも雪姫より長く生きていて、力が弱い。それ故に調査や安全策や一矢報いるといった、いわゆる転んでもただでは起きないということに関しては信頼が置ける人物もある。

まあ、不死人にはそこまで必要になる安全策もないが。

ともかくとして、この黒斗に限つて言えば手ぶらで事を済ましてくるなど有り得ないと言つていい。

「いやあ、京都見学が存外楽しくてなあ。ほれ、お土産の生八橋」

だが、雪姫の問いにあつけらかんと笑う。

ビュオ!!

その笑いにイラツとした雪姫が再び氷の矢を放つ。

しかし生八橋を盾にされたので仕方なく当たる前に消した。

「まあそんなにイラつかな」

「誰のせいだ! 誰の!」

まあまあ、と落ち着かせてから雪姫に背を向けて黒斗が告げる。

「俺に任せてくれるんだろう?」

その言葉の真意を正しく汲み取った雪姫は。

「話せ」

黒斗の首筋に氷で出来た刀を出現させた。

部屋から出ようとすれば首が胴体とさよならするようにな。

黒斗は確かに情報を持ち帰り、しかしその危険度が高いために何も話さなかつた。

だから、例え脅してでも聞き出す必要性を感じたのだ。

「断る」

だが、黒斗は構わず出ようとする。

当然、その刃は黒斗の首を通り抜け。

しかし、頭は未だ健在のままだつた。

「お優しいね。空気の中の水分を固めただけの、ただの氷とは」

黒斗の首からは血が流れておらず、刀の通ったところが黒い靄で覆われてるだけだ。

「魔力を纏わせた武器ならともかく、ただの物理攻撃は俺には基本効かない。そんくらいてめえだつて分かってるだろ?」

生物ではなく、本当に塵芥が集まつて出来たような黒斗は身体の構造など、有つて無いようなものである。

「ああ、だがな」

雪姫が呟くように言い。

次の瞬間には、至近距離で黒斗に手をかざして立つっていた。

「勘違いはするな」

「へえ、力の差があるから逆らうなつてか?」

挑発氣味に聞く黒斗に、首を横に振る。

「お前が、UQ<sub>私</sub>ホルダー<sub>た</sub>に必要だから話してほしいんだ」

辛そうなその言葉に、やれやれと言いたげに肩をすくめる。

「お前、まだ罪滅ぼしなんてくだらない感情を俺に向けるんじやねえだろうな?」

「……信じてくれるとは思つていない。でも、本当なんだ」

そうかよ、と言つてそのまま部屋を出て行く黒斗。

「黒斗!!」

止めようとする雪姫に、一度立ち止まつて。

「この前のきな臭かつた依頼。あれ、やっぱ繋がつてたよ」

それだけ伝えて、去つて行つた。

場所は変わつて中庭。

「ああああああああああああああああああ!!!!」

先ほど約束した通り、子供たちを空中に浮かして遊んでいたら大きな声が響いた。

声の主は分かつている。

「どうしたんだよ？ 刀太」

「どうした、じやねえよ!! 説明しろお！」

「いや、だから何をだよ」

「えつと……」

「決めてないのかよ」

「う、うるせえ！とにかく、一から十まで全部話せよ！」

無茶苦茶な要求をする刀太にどう断つて逃げきろうが考えていると。

「僕も聞かせてほしいですね、黒斗殿」

そこに九郎丸も、いや、この前仕事について来た全員が集まつていた。

「はあ、分かったよ。ってか、お前ら学校に行つてたんじゃないのか？ 夏凜はまだそつちだつて聞いたけど」

「それについては雪姫殿が、そろそろ貴方が戻つてくる頃だろうから、と呼び戻してくれたのです」

九郎丸の返答に小さく舌打ちしてから本題に入る。

「で、お前らは何が聞きたいの？」

「僕たちが聞きたいのは、いくつかある……けどまず、黒斗兄ちゃんは何者なんだ？ どういうことか教えてくれよ。小夜子の下位存在ってなんなのか」

それまで見たことがないほど真剣な表情の三太。

水無瀬小夜子の存在が三太にとつて無視出来ないほど大きいこともあり、嘘や半端な説明は許さないと言外に語る。

黒斗は諦めて説明を始める。

「俺が瘴気で出来てるつて話は？」

「聞いてます」

黒斗の質問に肯定の答えが返ってくる。

「じゃあまず聞くが、瘴気ってのはなんだと思う？」

その質問に、えつ、と固まりながら、キリエが答える。

「瘴気って悪い気……じゃないの？」

「なら、気の善し悪しは？なんなら氣そのものってのはなんだ？」

「よく分かんねえけど、氣ってエネルギーなんじゃねえの？」

首を傾げながらも今度は刀太が答える。

「じゃあ、それは『何の』エネルギーだ？」

次の質問には、一同口を閉ざす。

大して意識して使つていなかつたのもあつて、すぐに答えられなかつた。

「えつと、体力とか精神力とか気合？」

とりあえず適当に答える刀太に首を横に振つて否定する。

「それも間違いではねえよ？じゃあ、それらの力の大元は何だつてことだよ」

不正解と言われ、悩む。

「……魂、ですか？」

全員が黙る中、自身の感覚を思い出し、予想を立てて答えたのは九郎丸だ。

「正解だ。詰まる所、瘴気ってのは魂の悪い部分や負の感情の極々小さな欠片だ」

正解は分かつたが、結局黒斗の正体の話には届いていない。

「早い話、瘴気は魂のカスだ」

黒斗の説明は続く。

瘴気は魂のカスであり、欠片である。

そして、魂は外に発することが出来るのだ。

「例えば、物凄く怒つてる奴が近くにいると、直接そいつの様子を見てなくとも、『あつ、こいつ怒つてんな』つてのが分かる時があるだろ？魂を外に発している状態つてのはそんな感じだ」

そういった発せられる魂のうち、負の感情。怒りや悲しみなどがそ

れに当たる。

それらは、別に普通に発せられる時には大して意味がない。  
文字通り吹けば飛ぶ、砂っぽいゴミのようなものだ。

だが、それらが集まりやすい場所がある。

簡単に表現すれば、汚いゴミの溜まり場が適当だろう。

その溜まり場の様子を指して、瘴気が濃いと言うのだ。

「で、魂のカスと言えど、集まれば力だ。膨大な量と質が合わされば、  
ただ生前に力を持つてただけの幽霊を荒御魂に変えちまうくらいに  
な」

その説明に三太が俯く。

水無瀬小夜子は、無念のうちに殺された悲しい魂の受け皿に自らな  
り、その結果、世界を滅せるだけの力を手に入れたのだから。

「実際、水無瀬小夜子の例を見れば分かる。魂は集まれば他のものに  
影響を与えるんだ」

「ねえ、それじやあ鬼とかはどうなるの？別に瘴気を放つてるからつ  
ていつも怒つたりしてるわけじゃないでしょ？」

「あく、それは属性が関わってくるんだ」

途中のキリエの質問にもちゃんと答える。

「炎とか氷じゃなくて、陰と陽な。鬼とかは陰の属性存在だから、瘴気  
をデフォルトで放つてる」

その辺の話は今関係ないから、と置いておいて説明を再開する。

「魂が集まれば何かしらの影響が必ずある。なら、集まつた魂の欠片  
同士で影響し合つたら？んでもって、その影響の仕方が周りの欠片を  
より集めるように作用したら？」

その言葉に、頭の良い九郎丸とキリエが理解する。

「そうやって集まつた魂の欠片が、もし普通の生物と、人間と似たよう  
な量やら大きさやら質やらを手に入れたら？」

そこまで言われて、ようやく三太が分かった。

唯一分からぬ刀太が質問する。

「でもよ、魂が集まつて人間のそれっぽくなつたからつて人間みたく  
なれんのか？」

「じゃあ、水無瀬小夜子はどうだった？」

そう聞き返されて思い出す。

「水無瀬小夜子は言つちまえ、ただの怨霊だつたよ。確かにな  
けど、一言区切つて告げる。

「神に近い存在だと思わなかつたか？」

その言葉にゾクリとする。

確かに水無瀬小夜子はただの幽霊と言うには一線を画すどころか  
優に超える存在だった。

言い換えるなら、力が集まればそれまでより高次元の存在になれる  
ということ。

魂の欠片でも、集まれば人のそれに近い存在になれるということ。  
「まあ、どうして俺がちゃんと一人の人としての意識があるのかは俺  
にも分からん。が、俺を構成する原理はこんなもんだよ」

その言葉を最後に説明を終える。

説明を飲み込むのに、少し時間を要してる面々。だが。

「ようし、んじやあさ黒斗。力試しに腕相撲しようぜ！」

能天気に勝負を申し込む刀太。

「あんたねえ、少しほ悩みなさいよ！」

叱咤するキリエに素で疑問符を浮かべる刀太。

「なんでだよ？説明はしてもらつたし、敵でもない。んでもつて、こいつ  
は俺より強い。なら一回戦つてみるのも別に悪くねえと思うぞ」

意外な正論に反論出来ないキリエ。

「くはつ、面白え。いいぜ、刀太。腕相撲だろ？受けてやる」

笑いながら承諾する黒斗にやつた、と喜びながらついて行く刀太。

「やつぱり、刀太くんは凄いな」

「バカだけどね」

呟く九郎丸とため息を吐きながら呆れるキリエ。

けど勝負が気になるのか、先について行つた三太を追つて行つた。

## お茶目に腕相撲！

……

世界には、黒という属性がある。  
闇でもなく、悪でもない。

それらを含むことは多いが、そうでなくとも存在する。  
陰ともまた少し違うこの属性は。  
大体が存在自体間違っていることが多い。

……

アジトの船着き場にて。

どこから持つて来たのかドラム缶が置いてあり、そこに腕相撲の準備万端で刀太と黒斗が対峙していた。

その周囲、旅館側にたくさんの中見物人が集まっていた。

九郎丸たちに加えて組織の構成員たちである。  
「ようし、準備はいいかよ？」

「ああ、いつでも来い」

刀太の問いに頷く黒斗。

緊張感が周囲を包み。

審判役の構成員がコインを弾き。  
チヤリイン。

コインが、落ちる。

ドツ!!

勝負は一瞬でついた。

刀太の肩から右手までをドラム缶に残し、他の身体は海まで飛ばされて。

「え、ええええええええええええええええ!!!!!!」

刀太だけではなく、周囲の全員があまりの結果に驚いていた。

!!

そのまま刀太は飛ばされて。

遠く、ドボン！と刀太が海に落ちる音がした。

数十分後。

何とか海から上がってきた刀太が黒斗を問い合わせる。

「なあーあれ、なんだよ！どうやつたんだよ！？ってか海まで腕が千切れるくらいの勢いで飛ばすな！」

「くく、あー今は今は!!いやあ、悪い悪い。お前の気の使い方が素直でな、ちょっと遊びたくなつちました」

笑いながら軽く謝る。

「大丈夫!? 刀太君！」

そこに九郎丸たちが走つて近付く。

その間に、刀太は自分の腕をくつ付けていた。

「本当にどうやつたのよ？ 黒斗」

心配して刀太に寄り添う九郎丸に代わつてキリエが質問する。

「ああ、ありや合氣道の応用だ」

「合氣道？」

聞き返す三太に頷く。

「合氣道つてのは極端に言えば最小の力で流れを制する方法だ。それをちょちよいつとコントロールしてやれば……」

と言つてチラ、と刀太を見やる。

「でもよ、あそこまで極端なことになんのかよ？」

文句ありげなジト目で睨む刀太。

「普通はなんねえよ？俺だつてあそこまで行くとは思つてなかつたつての」

本當か？と睨むのをやめない刀太に、慌てたように解説する。

「えつとな、原理としては氣をぶつけ合う時に、刀太の力を利用して刀太自身にぶつけたんだよ。だから、身体全部が少し空中に浮くかな、とは思つてたけど、あんな遠くまで、まして腕が千切れるとか考えもしなかつたんだって！」

「でも、ならどうして刀太兄ちゃんはあそこまで吹つ飛んだんだ？」

「そりやまあ刀太の力が凄かつたから、だな」

「そうなのか？」

確認の言葉に大きく頷く黒斗。

「そうだよ。刀太君の力を利用してるんだから、刀太君の力が強い分効果が上がるんだからね」

九郎丸の補足に照れたように鼻を搔く刀太。

自分が認められることは刀太にとつてかなり嬉しいことらしい。

「でも、それでもよくあそこまで飛ばせたわね？」

「まあ、俺は存在がエネルギーそのものもあるからな。氣を扱うつてこことに関しちやお手の物だよ」

瘴気、つまり氣の集まりで出来た黒斗。それ故、氣の扱いに長けているのも当然といえば当然である。

へえ、なるほどねえ。と納得するキリエ。

「まあ、何はともあれ、悪かつたな刀太。今度何か奢つてやるからそれで許してくれ」

「それより！今の合気道だつけ？教えてくれよ！」

「全力で断る」

「そう言わずにさ！な！な！」

目を輝かせて頼む刀太に助けを求めるように周囲を見るが、九郎丸たちは全員、諦めてくれと表情で語つていた。

「まあ、細かく特訓を見る気はないが、基礎だけならな」

「サンキュー！」

やりい！とガツツポーズする刀太。

「まずは、力のベクトルがどう向いてるのかを意識しろ。日常生活の中でもな」

「ベクトル？」

ああ、そうだ。と頷いてから説明を続ける。

力を込める時はもちろんだが、何気ない動作でも動く時には必ず力が発生する。その流れを即座に理解出来るようになるのが第一歩だと言う。

「瞬動術にしてもだが、ただ身体を動かすのと合わせて連動させるだけじゃあまだまだだ。そうやつてまともにコツを掴んだだけで何となく扱つてるだけじゃレベルとしちゃあ低い。腕相撲はコツを掴むのには最適ではあるがな。けど、まだ上がある」

「え！あれよりもかよ？」

かなり瞬動術をマスターしたという自負のある刀太がその言葉に驚く。

「当たり前だ。むしろ、たかがあの程度でマスターした気になつてたら、上のレベルにはついていけないぞ？」

上？という疑問に頷いて、一人の名前を告げる。

「フェイト・アーヴェルンクス」

その名前に三太以外の三人に緊張が走る。

その人物は、アマノミハシラ学園の任務に就く前に戦つた相手であり、キリエの能力をフルに使つて、ここにはいないロボットの不死人である飴屋一空と夏凜の力を合わせた全員が全力を振り絞つて、どうにかこうにか実力の拮抗している雪姫と戦わせることが出来た、強敵以上の難敵である。

同時に、刀太の両親の仇もあり、刀太がより強くなるうと決心するきつかけとなつた人物もある。

黒斗もUQホルダーのメンバーであり、調査は得意。

ならば当然、フェイトと敵対したこと知つていてる。

「あれと対峙するのには、正直魔法が欲しいところだが、まあ仕方な

い。闇の魔法マギア・エレベアも、別に切り札になるくらい強力ってわけでもない。で、基本瞬動術オンリーで奴と戯れるんではなく、戦いたいのなら、今のレベルじゃあ遊ばれることすら難しいぞ」

突き付けられた現実に俯ぐ。

それだけ、彼我の差は開いている。

「だからつて一日二日で力なんざ手に入れられるわきやねえ。だからまずは、力の流れの把握を指一本どころか毛先一本一本に至るまで感覺で身に付ける。いいな？」

「おう！」

元気な返事に気をよくしてその場を去る。

「んじゃ、一二、三日調査に行つてくるから、それまでにその辺レベルアップしとけよ？」

それだけ伝えて船に乗つて行つてしまつた。

「あいつ、何か急いでなかつた？」

「確かにそう見えたね。もしかして、この間の報告で進展があつたのかな？」

黒斗の様子に疑問を抱きつつ、次に会つたら必ず報告を聞こうと決めたのだつた。

## セッティングと覗きは基本のセット

……

何も、全てが絶望に包まれていたわけではない。

希望を抱いた時もあつた。

夢を目指した時もあつた。

現実に打ち勝てるよう努力したこと、あつた。

けれど結局。

その希望が続くことなど、夢が叶うことなど、努力が実を結ぶことなど。

ただの一度もなかつた。

ただ、それだけ。

……

一応の調査を終えた黒斗は、アマノミハシラ学園にいた。  
キチンと制服を着て。

「……なんで、こうなつたんだろうなあ」

「愚痴つてないで、早く今後のこと話をしなさい」

そして、夏凜と二人きりでテーブルに座り、そのテーブルには紅茶とデザート付き。

デート以外の言葉が見当たらぬシチュエーションの只中に。  
こうなつたのには話ほんの数十分前に遡る必要がある。

「数十分前」

刀太たち一行（一空や夏凜を含めた六人）がお茶をしながらバイオハザードテロについての確認をしていたところに黒斗がやつってきたのだ。

「やつほ。皆さんお揃いで」

「黒斗？」

「なんでここに？という顔の刀太に、

「お前らがここにいるつづうからわざわざ来てやつたんだろうが」

少し苛立ちながら伝える。

その様子からこの学園にはあまり来たくなかったのがありありと伝わる。

「やつほー、久しぶりだね。黒兄くろにい」

「そうだな、一空。調子はどうだ？」

「元気だよ」

軽い挨拶を交わす二人。

「なんだ？二人は仲いいのかよ？」

「まあね」

「子供にそんなキツイ態度取れねえだろ」

疲れたように言う黒斗に頬を膨らます。

「ひどいなあ、黒兄は」

「精神年齢はどんな見た目でも誤魔化せねえだろが」

「そうかな？」と首を傾げる面々。

確かに一空の精神年齢は十三歳だが、これでも七十二年は病院のベッドの上とはいえ生きているし、子供とは思えないほど能力も高いし、考えもしつかりしていると思うのだが。

しかし、黒斗的には一空は子供らしい。

「……それで、何故ここに？」

それまで驚愕で固まっていた夏凜が硬直から脱して本題に入る。夏凜にとつて、黒斗の方から話しかけてくれるということ。

それは彼女の内で有り得ないこととして確立してしまっていた。

三百年もの間、それを望まなかつた日は無いというのに。

だが、今はその話は置いておく。

黒斗が用事ということは雪姫に依頼された調査に進展があつたということのはずだから。

「決まつてんだろ。例の件だよ……けど」

報告の前にチラと一空を見やる。

「ん？僕なら問題ないよ、ちゃんと雪姫様から許可出てるしね」

返答に舌打ちで返す。

その返しに、酷くない！？と涙目になる一空だが気にしない。

「つつても、大したことは分かつてねえんだけどな。今回分かつたのはそこそこでかい組織がバックにいるかも知れないってことだ」「組織？この前の除霊の件はやはり実験だつたということですか？」

九郎丸の問い合わせに頷いて続ける。

「ああ、しかも実験の規模が予想より大きい。下手すりや日本全国で実験が行われてる」

その内容に全員が驚く。まさかそこまでとは誰も思わなかつたからだ。

「あと、最近物品の盗みも多発してる」

「盗み？」

「一空の確認にああ、と返す。

「別にたかが大金程度とかお店の万引きなら気にも留めないんだけどな」

「一体何が盗まれたのよ？」

「いわく付きの物ばっかりだ。しかも、一件や二件じゃねえ」

キリエの質問の答えは空気を少し重くした。

「具体的には？」

夏凜の質問に、チラとそちらを見て答える。

「一番多いのは呪いが掛かつた武器だ。他にもそういう伝承が付いたヤバイもんを中心にして盗まれてる」

「それは……」

確かに良くない事態である、と夏凜は警戒心を強くする。

黒斗は基本的に報告を最小限にする傾向がある。

それは仲間を不用意に危険に巻き込まないためであり、大体は舌先三寸で煙に巻くことで関わらせないようにするためだ。

その黒斗が素直にマズイ状態だと告げる。

よっぽど危険なのかもしれない。

少なくとも、ここにいる自分たちに素直に危険を伝えるくらいに

は。

自分たちよりよっぽど危険な立ち位置にいるくせに。

(それでも、やはり貴方は一人で背負つてしまふのでしょうか?)

寂しげに、黒斗を見やる。

黒斗は今、刀太たちに協力を仰ぐか真剣に悩んでいる。

その視線に黒斗は気付かなかつた。

黒斗は。

黒斗と夏凜を除いた五人がアイコンタクト。

一秒すら掛からない完璧な連携で、作戦を実行に移す。

「さあつて、報告も聞いたし俺は修行に行こつかな」

「なら、僕も付き合うよ。刀太君」

「僕も行くよ、刀太兄ちゃん」

「あ、そうだ。さつき季節限定のオススメスイーツの告知がしてあつたんだ」

「え、本当?一空。じゃあ私たちも食べにいきましょ。あ、夏凜と黒斗の分も頼んどいてあげるわね」

一斉に立ち上がり、そそくさと退散。

言つたとおりにケーキセットを注文するのも忘れない。

ポカン、とする二人を置き去りに、ミツシヨンコンプリート。

達成時間は十秒。評価はSだ。コングラツチュレーション!

そして、数分後。

ケーキセットが運ばれて、今に至る。

「今後つてもなあ」

「貴方が決めかねているということは、相當に危険な案件なのでしょう? 素直に私たちに頼つたらどう?」

その言葉に顔をしかめる黒斗。

やはり巻き込みたくない、という思いがあるのだろう。

そのためか、答えようとしない。

「どの道、貴方が抱えられる以上の事態に陥つたら私たちが必要になるのよ? それなら、今のうちから頼つておきなさい」

久しぶりにまともに話せた上に、黒斗が弱みを見せているという絶好の状態。

そのせいか、普段の彼女よりかなりグイグイ食い気味に頼るよう迫っている。

「…………」

「頼りなさい。……頼つてよ。ねえ、黒斗」

唇をキュッと結び、縋るように言う。

「~~~~~わあつたよ！必要だと思つたら絶対頼るよ」  
目を潤ませて、上目遣い。その上そんな悲しそうな顔までされたら、逆らえない。

三百年間まともな接触をしてこなかつた黒斗だが、別に夏凜が嫌いになつたわけでもない。

夏凜に冷たくは出来ても、夏凜のお願いに聞く耳持たないなど有り得ないのだ。

自分のお願ひを聞き入れてくれたことに嬉しく思つて笑つていると、視線を感じた。

急いでそちらを確認すると、見覚えのある影が五つ。

（もう！あんたたちが変に遠回りするから肝心な部分が見れなかつたじゃない！）

（仕方ないだろ！行つた道が悪くて、ショートカットしたら絶対にバレるルートしかなかつたんだから！）

（それよりも、これは覗きじゃないのかな？）

（でも、九郎丸君も気になつたから参加してるんだろう？）

（そ、それは皆が賛同していたからであつて……！）

（こ、これが恋愛つて奴か……）

（変な関心してるんじゃないわよ、三太！）

（つてか、あんまり騒いでたら見つかるぞ！）

小さく喧嘩しながら二人の様子を窺う五人。

皆を静めるために、全員が一人から目を離した瞬間。

「貴方たち、何をしてるの?」

「覗きたあ、随分と高尚な趣味してるなあ?」

青筋を立てた黒斗<sub>魔王二人</sub>と夏凜がそこに立っていた。

「いや、あの……」これは

「言い訳は無用よ」

そう言つて刀を抜こうとする夏凜を必死で止める。

「てめえら仲良くお仕置きだこら」

しかし黒斗が指を鳴らして黒針を五人に刺す。

それ自体は特に痛みも無い。

だから四人は疑問符を浮かべていた。

一空以外。

「ごめん! 黒兄い!!だから、だからどうかそれだけは!!!」

必死に懇願して謝る一空にギヨツとする。

そこまでヤバイのかこの針は。

全員急いで抜こうとするが。

「ダメだ」

パチンッ!

無慈悲に鳴らされる指。

その瞬間、身体中が熱湯で煮込まれてるかのような激痛が全身を包む。

「がああああああああああああ!!!!」

あまりの激痛に全員が叫ぶ。 !!!

空気という空気を全て吐き出した頃。

もう一度指を鳴らして、お仕置きを終了する。

「はあっ、はあっ」

失った空気が愛しいと言いたげに全力で呼吸する五人。

「な、なんなのよ? 今のは?

「あれが俺の魔法の一つ『黒針 煮式』だ」

「酷いよ、黒兄い」

ぶうぶう文句を言う一空を見もせずに切り捨てる。

「うつせ。それにほんの数秒だぞ？全開でやつたけど」

「全開じやん！キツかつたよ！」

「幻術でぎやあぎやあ喚くな」

黒斗の言葉に驚きながら反応する九郎丸。

「あれが、幻？」

「おう。一応教えとくと、黒針は幻術の発動キーみたいなもんでな。術式に合わせた幻術を打ち込むようになつてんだよ」

言われた一空を覗く四人は今でも信じられない。

あの感覚は本物としか思えなかつた。それくらいの痛みだつただ。

「でも黒斗、全開は少しやり過ぎよ？あれ、殺し用の魔法の一つじやない」

夏凜の言葉にえ？と冷や汗が流れる。

「まあ不死人だし」

あんまりな扱いにさしものメンバーがブチ切れる。

「黒斗おおおおおおおおおお!!!!」

その後、少し激しい喧嘩になつたのは言うまでもない。

デートにデバガメは付き物だよね！

……

自分の存在は灰色だ。

黒か白か、決まっていない。

決めたい色はある。

けれど今は、そんなことは関係なく。この時を楽しく過ごしたいと思う。

本当に、心から。

……

刀太たちが黒斗に調査を手伝うか聞いたところ。

「いや、事態は進んでるが、今から急に動いても大して状況は変わらん。だからしばらくは休暇だ。好きに過ごせ」

そう言つたので、休養を取ることにした。

「特訓もいいけど、適度に遊んでガス抜きはしとけよ」

その言葉に修行三昧に浸ろうと思つていた刀太は、まず遊ぶことにした。

ちなみに、黒斗は休めと言つたのにまた調査に出ようとしたので夏凜に捕まつて説教されることになつた。

そんな訳で刀太の選択肢は、誰と遊ぶかに絞られたのだが。

キリエはやることがあると言つて何処かへ行つてしまい、黒斗と夏凜は付かず離れずの距離で連れ立つて行つてしまつた。

また付いて行こうとしたが、黒針で牽制されたので諦めることに。あの幻術には、正直二度と掛かりたくない。

三太と一空は、ゲーム大会のためにゲームセンターへ。

結局、選択肢は一つしか残つていなかつた。

とはいえ、嫌ということは決してない。むしろ喜ばしいとさえ思う。

「九郎丸、遊びに行こうぜ！」

「ぼ、僕でいいの？」

「ばっか、おめえ。俺はお前がいいんだよ」

満面の笑みを浮かべる刀太に少し顔を赤くして、九郎丸は手を引かれながら付いて行く。

――そして。

（なあ、夏凜よお。いくらやられたからって俺にデバガメさせるのはだなあ……）

（うるさい。何より重要なのは、九郎丸が女の子になるかどうか。それ以外は全部枝葉よ）

（もう、だからって何であたしたちまで巻き込むのよ？）

（キリエもノリノリで参加してたような……）

（黙りなさい、三太！）

（それにしても、みんな好きだねー）

適当な木陰の中で、黒斗以外の四人が集まつてヒソヒソ話していた。

ここにいない黒斗は通信魔法で連絡を取っている。

その黒斗は身体が靄で出来てる特性をフルに生かし、影に潜んで靄状の身体に変化させて二人の様子を観察していた。

実際にその姿を見てみると、テニスボールくらいの大きさの玉型の靄に目が付いてるという、ホラー映画で大活躍な見た目をしている。

ちなみに、四人の手には黒針が刺さつており、そこから幻術をコントロールして黒斗が見た景色を四人に見せるという、意外と器用なことをしていた。

（ていうか、黒斗の幻術つて便利ねえ）

（うん、僕もこういう使い方は初めて知ったよ）

（アホかお前ら、昔からの治療法として催眠術を使つた精神治療つてのは行われてたんだよ。幻術だつて、平和的に使えばセラピーの分野

として活躍するんだからな）

黒斗のプチ講座に関心しながら二人の様子を盗み見——もとい観察する。

一方、そんな仕返しが実行されるとは微塵も考えていない二人は。

「ほら、やつてみろよ。九郎丸」

「で、でも僕に出来るかな？」

UFOキヤツチャーの景品を取ろうと頑張っていた。

中くらいの猫のぬいぐるみが数種類並べられていて、細い板に乗った景品を落としてゲットするタイプだ。

刀太に背中を押されて、とりあえず一回チャレンジする九郎丸。

灰ブチの猫を狙ってやってみる。

見事に当たつて少し動くが、それだけでは落ちない。

「あつ……」

「大丈夫だつて。一回でダメならもう一回、それでダメだつたとしても何度もやりやあいいんだよ」

「う、うん！」

刀太に勇気付けられて、嬉しそうに再度挑戦する。

また当たつて動くが、まだ落ちない。

三度、四度……と挑戦していき、そろそろ落ちそう、というところまで動かした。

「もうすぐだぞ、丁寧にな？」

「うん……」

刀太が固唾を飲んで見守る中。

ほんの一瞬だけ、長くボタンを押してしまった。

「あつ！」

九郎丸は失敗に気付いたが、無慈悲にもアームは降りていく。

「ううう、でももう一回だ！」

意気込む九郎丸がお金を投入しようとするのを手で制する刀太。

「いや、ちょっと待て」

降りていったアームの先端が灰ブチ猫のチエーンを引っ掛け。すぐ隣まで移動していた黒猫に勢いよく当たつて。

二つの猫のぬいぐるみが落つこちた。

まさかのダブルゲットである。

「おおおおおおお！すげえぞ、九郎丸！一つもゲットした!!」

「やつた？……えへへ、やつた！」

跳んで喜びながら、片方の黒い猫を刀太に差し出す。

「はい、二つ取れたから一つ刀太君にあげるよ」

「いいのかよ？」

「うん、刀太君が励ましてくれたおかげで取れたようなもんだし、部屋に置いておいてくれればいいからさ」

「サンキューな、九郎丸！」

「えへへ、どういたしまして」

そのまま連れ立つてクレーンゲームコーナーから離れていく。

そんな二人を見たデバガメ組みの面々。

(……黒斗、あの猫を取つて来なさい。出来れば白猫を)

特に夏凜がとんでもなく不機嫌オーラ全開になつていた。

(馬鹿言うな、夏凜。見つかるに決まつてんだろ)

(いいから!)

(待つた待つた！よくないわよ！尾行はどうなるのよ!?)

慌てて止めるキリエたち。とりあえず黒斗は尾行を続ける。

(ほら、二人を見て羨ましくなつたのはわかるからさ。後で黒兄に取つてもらうといいよ、うん。あ、黒兄、僕にも取つてね?)

(…………羨ましくなんて、ないです)

(間がありすぎだつつの)

(あ、それより二人ともプリクラコーナーに入つてくぞ)

(それよりとは何？今一番重要なことは黒斗があの白猫を取ることであり、それを私に渡すことよ。それ以上の価値など、微塵の可能性すらありえないわ)

(夏凜、睨みが強烈過ぎて三太が脅えてるから!)

キリエが夏凜を抑えていると、中々プリクラコーナーの入り口から動かない刀太たちを見て、そうだ、と一空が提案する。

(あ、黒兄! プリクラがよく分かつてなさそなうな二人に教えてあげに行きなよ)

(はあ!? 本気で言つてんのか!?)

(うん、黒兄なら容姿を変えるなんて手足を動かすより簡単なことでしょ?)

(そりや、そりだけどな……)

実際、言われたとおりにやるのは簡単だ。

そもそも、手足を使うための身体を作らなければ動かすも何も無いので、それ以前の基本技能とも言える。

けど、だからって変装してまでやる必要性を感じるかと思えばいや、さすがに……と遠慮したくなってしまう。

(ねえ、頼むよ黒兄い)

出来るだけ子供っぽい振る舞いでお願ひする一空。

黒斗の弱点は実は結構色々あるが、これで元々イギリス紳士だった黒斗の一番の弱点は子供だと一空は思っている。

だからこうして『子供』を強調してお願ひすれば……

(つたく、わあつたよ。後で覚えておきやがれ)

(ありがと、黒兄)

舌打ちしながらも聞き入れてくれた黒斗に一空が満面の笑みになる。

——さらに場面は一人の方に戻り。

「お客様、何かお困りでござりますか?」

いつもより大分身長を高めに設定。

金髪オールバックで糸目の若干色黒の青年とくれば、もはや誰かも分からぬが、その正体は言わずもがな黒斗である。

「ああ、このプリクラで撮りたいんだけど、よくわからなくてな」

「すみませんが教えてください」

「かしこまりました。それではカツプル様一組ご案内です」

「カ、カツプル!!」

最後に添えられた言葉にとんでもなく動搖する九郎丸。

「ええ、最近のプリクラはちゃんと対策がとられるようになつたとはいえ、やはり女性客が多く監視カメラの死角になる場所が多いです。なので男性のみのお客様にはご遠慮願つてているのですが……お客様は男性でございますか？」

捲くし立てる店員の言葉に少し混乱しながらも、男だと言おうとした九郎丸の口を刀太が抑える。

「そ、そうっす！俺らカツプルなんすよ！」

「はい、それではご案内します」

そう言つて適當な台へ案内し、簡単に説明してその場を去る。

（つたく、これでいいのかよ？）

（大成功だよ！ありがとね、黒兄い！）

舌打ちしながら周りの死角へ行き、ホラーな容姿に戻る。

あとで絶対にあいつら折檻してやろうと思ひながら、二人がいるのとは別の場所に移動する。

（あれ？ちよつと黒斗？どこに行くのよ？）

（デバガメは終わりだ。この後続けるならお前らで勝手にやれ）

用事が出来た、と黒針を消して完全に尾行は終了。

容姿も元の姿に戻し、自分のやることに取り掛かる。

「さあつて。時間とお金、いくら掛かるかねえ？」

——場面は取り残された四人組みへ。

「どうするんだ？皆は」

「僕は一抜けた、と言つて三太はどこかへ行つてしまつた。

「もうちよつと見るのも面白そうだつたんだけどなあ」

そう言いながらも興味を失くしたように一空も去つていった。

「……どうする？」

「まあ、ある意味もう充分なものを見た気もします」

そういうつて、色々やる気をなくして、先の二人のようにその場から離れたのだった。

そして、刀太と九郎丸に再び戻る。

「刀太君！・どうしてか、か……カッフルだなんて言つたのさ!?」

プリクラの筐体の中で猛烈に抗議する九郎丸。

「気にしてること言つたのは悪かつたよ。けど、俺も九郎丸とプリクラ撮りたかったからさ。本当にごめんな?」

必死に頭を下げる刀太の様子に、善意でやつたことを理解して笑う。

「もうこれつきりにしてね？」

「ああ！・もちろんだぜ！」

笑顔でグツー！とサムズアップして答える。

「それじゃ、やろうぜ！」

「うん！」

意気揚々とお金を入れて、プリクラを撮り始める。

途中、『抱き合つて』とか『キスして』などと言つた指示に、苦笑する刀太と真っ赤になる九郎丸がいて、キチンとその様子はプリクラに写っていた。

プリクラではしやぐ二人とは対照的に、意氣消沈する人影があつた。

夏凜である。

「はあ、全く私は何をしているのでしょうかね」

自嘲気味に呟くが、その言葉が思つたよりもダメージになつた。

「あの馬鹿も、もう少しくらい……こちらを気に掛けてもいいじゃない」

辛そうに響く言葉は風にさらわれていく。

「せつかく……せつかく三百年ぶりに、まともに話せたというのに」  
一際強く風が吹いて、捲れないようにスカートを抑える。

そこに、新たな人影がいた。

「なあに、しょぼくれた顔してんだよ？」

黒斗が笑顔でそこにいた。

そのことは嬉しいと言えば嬉しいのだが、この顔を作っている原因でもあるので素直に喜べない。

「……誰のせいだと思つてるの」

かなり大きなため息と共に文句を言う。

怒鳴り散らす元気もない。

「そう俯いてんなよ」

だから誰のせいだと！とせめて睨んでやろうと顔を上げて。

何かが投げ込まれた。

タイミングよく顔を上げたためにジャストミート。

「わっふ！」

「それ、やるよ」

それが何かを確認する前に、黒斗は背を向けて文字通り風に乗つて足早に去つてしまつた。

全く、何を……と投げつけられた物を確認する。

白い猫のぬいぐるみだつた。

しかも、ちゃんと自分が欲しがつてた色の物だつた。

「これ……」

確かに、黒斗はこういつた細かい作業は苦手だつたはずだ。

一体、いくら使つてこれをゲットしたのだろうか。

それに、あんなぶつつきらぼうに投げ渡さなくともよいではないか。イギリス紳士だつたくせに、ムード作りも出来ないのか。

「ふふ……ばあか」

それでも夏凜の足取りは、スキップしそうなくらい軽いものだつた。

## 破章「黒」という存在 極めて Let, s コマ回し！

俺が持つてゐるものは多くない。

記憶もないし、夢はあるけど具体的じやない。  
けど、自慢の友達はいる。

闘う才能は持つてる。

今あまり持つてないからこそ。  
これから多くを積んでいこう。

「ふつー・ふつ！」

夕暮れの学園で、刀太がアルビレオ・イマの重力剣を振るう。

この黒い剣は柄にあるダイヤルを調整することで何<sub>t</sub>もの重さに  
することも、逆に紙より軽くすることも出来るものだ。

当然、刀太も<sub>t</sub>単位の重量で振るつていて。

「よお、ベクトルの意識は出来るようになつたか？」

そこへ、黒斗が声を掛ける。

「おう、中々ばつちりだぜ」

その質問に、サムズアップで答える刀太。

「ほお、じゃあ試してやる」

そう言つて、その辺を歩いてる生徒を指差す。

「あそこの黒髪の男。あいつはどつちが利き腕だ？」

「うえ！」

いきなりの難問に一瞬たじろいだが、真剣に男子生徒を観察する。  
少し距離があつて分かりづらいが、歩く時の踏み込みが右の方が強

く見える。重心のバランスも傾いてる。

「右利き」

「正解。もうちつと早く答えられるようにしとけ」

ちえゝ、と口を尖らせる刀太に、しかし黒斗は内心驚いていた。  
自分の力のベクトルの次は、当然他者のベクトルや流れを見極めさせ  
るつもりだつたのだが、それを指示を出される前に習得していた。  
(こりや、雪姫が入れ込む気持ちも分からんでもないな)

お互いに馬は合わないと思つてゐる雪姫と黒斗だが、意外と意見も  
合うし息も合わせようとすれば合うのだ。だからこそ、お互いに触れ  
て欲しくないポイントも知つてゐるのだが。

その辺りは置いておいても、伊達に百年単位の長い付き合いではな  
いのである。

「でもま、流れの把握に関しちやもう次の段階だな」

「次?」

「ああ、実際に戦いの中で流れを掴めるようになると」

「黒斗が見てくれるのか!」

期待に満ちた目を向けられるが。

「基本的には九郎丸辺りに頼め」

素氣無く断られる。

その返答に凹む刀太。

「けど、最初だけ見本を見せてやる」

来い、と手招きする黒斗。

「後悔すんなよ!?

挑発しながら、嬉しそうに刀を振るう。

素直すぎる袈裟斬り。

その上から下へのベクトルに対し、さらに上から下へ気力をぶつけ  
る。

ガクン!

強制的に地面に剣を叩きつけさせられた刀太の体制が大きく崩れ  
る。

そのまま倒れこむ方向に、再びベクトルを合わせて気力をぶつけ

る。

不自然な体制から地面に倒れるはずだつた刀太は、その一撃で十メートル以上も離れた壁に激突した。

「どうだ？ ちつとは何か掴めたか？」

上下逆さま状態の刀太に質問を投げかけるが、刀太は笑いながら否定する。

「分かるか！ つてか、あの腕相撲の時のやつはどうやるんだよ？」

聞き返された内容に、黒斗は鼻で笑つて応答する。

「はっ！ あれを極めるのはもつと後に決まってんだろう？ まずは実戦で、相手の流れに合わせることからだ」

その次に流れの相殺、流れの変化へと続き、最後に流れの掌握に持つていく。

「この修行には手つ取り早く、なんて便利なものはねえ。どれだけ早く習得出来るかは完全に本人の才能とセンスに依存する」

先は長そうだ、と逆にやる気に燃える刀太。

「よおっし！ やるぞお！」

励む刀太に苦笑しながら、再び構える黒斗。

「今言つた掌握までの氣力の扱い方を一通り段階ごとに教えてやる」

またも手招きする黒斗に、刀太が挑む。

全力で近付いて横薙ぎ。

その出だしに拳を叩き込まれる。

そのせいで、振り抜くのに数秒遅れる。

そして振り切る前に横つ腹に一撃もらい、再び吹つ飛ぶ。

「これが相殺だ。ポイントは力が乗る前に叩くこと」

アドバイスをして今度は黒斗から仕掛ける。

瞬動術を使って一瞬でまだ空中にいる黒斗の懷へ行き、足下からの逆袈裟斬り。

しかし気が付いたら、右真横に弾かれていた。

黒斗の体制から見るに、左の脚で蹴り払われていたらしい。方向転換が自然過ぎて、気付けなかつた。

「変化」

そのまま右のつま先が蹴り込まれて刀太の額に当たり、とんでもない勢いで後頭部と地面がぶつかる。

「つてえ!!」

「慣れるまでは攻撃を少しだけ逸らしていなすところから始めるようにな」

バク転で起き上がり、もう一度刀太から瞬動術で仕掛ける。

今度は黒斗の裏を搔くために、黒斗に刀をぶつける直前で重量を極限まで軽くする。

「！」

そして一瞬で斬撃の方向を縦から横に変え——  
ようとして、くるくる回転してしまった。

「あ、あれ？」

「掌握まですれば、格下相手に遊ぶことも出来る。こいつにコツは無い。今まで学んだことを一度に行えば可能だ」  
そのままくるくる回転を続けさせられて目を回すまで続けられた。

十数分後。

「うぼえ……まだ気持ち悪い」

リバースこそしていらないものの、かなり危ない状態の刀太が床に手を突いていた。

九郎丸や三太、キリエが背中をさすったりして落ち着けている。

「どんだけやつたの？ 黒兄

「ベーゴマ目指してみた」

適当な返しにため息が返ってくる。

「まつ、手本は見せたんだ。これで習得出来なきやそれはこいつの問題だ」

「いくら何でも横暴じやないの？」

淡々とした言葉に異を唱えるキリエに首を振る。

「これで成長出来りやあ、才能は認める。逆に何にも開花しねえつてならこいつはそこまでだ。んでもつてその程度だつた場合に、俺は面倒を見るつもりはねえし義理もねえ」

実際、教えてほしいと言われたからレクチャーしただけであり、わざと間違つたことも教えていない。極端にスバルタなのは否定しないが、教わりたいとそちらから言つてきたのに習得出来なかつたからといって、責任を追及される必要性など欠片も感じない。

才能を人のせいになど、出来ないのだから。

その正論に、反論も文句もない。

空氣を変えるようにともかく、と言つて。

「全部出来れば皆伝だ、免許はねえがな」

それだけ伝えて全員に背を向ける。

「もうしばらくしたら、また調査に行く。もしかしたら、誰か付いてきてもらうかもしれん」

覚悟だけしておけ、そのまま歩き出す。

「待ちなさい」

と、その足を夏凜が呼び止める。

「その時は、私を——」

「お前は連れて行かない」

自分も共に、という夏凜の願いは言い切る前に断たれた。

「お前は、俺の調査には相性が悪いからな。それに……」

「それに、何？」

珍しく歯切れの悪い言い方に踏み込む。

「……」

一度黒斗は頭を振つてから。

「いや何、久しぶり過ぎて距離感が狂いすぎな気がしてな  
少し悪意の見える笑いで告げた。

「えつ？」

突然の拒絶に戸惑う夏凜。

夏凜だけではない。

周りの面々も、黒斗の言葉に驚いていた。

「でも、だつてあの頃は……」

これくらい普通だつた、と言いそうになつて。

そこに現実が降りてくる。

「もう、俺は『違う』」

その言葉に込められた感情は何だつたのだろうか？

悲しみか？

自嘲か？

はたまた、悪意か？

その真意は誰にも分からぬが、言われた夏凜の顔に浮かんだ表情は誰でも分かつた。

絶望。

呼んで字の如く望みを絶たれること。

あまり親しくない三太でさえ理解した。

膝から崩れ落ちる夏凜に、何て声を掛けていいか迷っているうちに。

黒斗の姿は見えなくなつていた。

完全試合つて、やられた方は面白くないよね

.....

いつ生まれたのか。

定かではない。

何故生まれたのか。

定かではない。

何のために生かされているのか。

それだけは、定かである。

そして、それ以上に望むものなどない。

.....

学園内で、黒斗が放つた言葉のせいで刀太たちの空気が微妙になっている中、刀太が雪姫から呼び出された。

(雪姫の方から俺だけ呼ぶって珍しいな)

疑問に思いながらアジトに戻り、雪姫の部屋に入る。

そこでは雪姫と一緒に黒斗が待機していた。

思わず、刀太は黒斗に突つかかる。

「黒斗！お前のせいでの俺たちの空気が微妙なんだよ、どうにかしろ！」  
「貴様何をしたんだ？」

バ k……直情的でコミュニケーション能力に長けた刀太にここまで言わせることをしてかした黒斗を呆れながら見やる雪姫。

「別に、浮かれてるようだつたからな」

その一言で、誰に対してもかしたのかは即座に理解する。

「全く、三百年ぶりなのだからもう少しくらい……」

ため息混じりで言う雪姫に、しかし黒斗は折れない。

「幻想に浸っていて許される立場じゃないだろうが。現実が辛いからって甘い幻想に逃げたくても、実行させるわけにはいかねえよ」

正論ではあるので、最早雪姫からはため息しか返つてこない。

「んで、何で俺が呼ばれたの？もしかして、黒斗のやつてる調査に関することか？」

本題に入る刀太。

正直、自分たち学園組を気まずくした原因を作った黒斗に何とかしてほしいが、今は置いておく。

「ああ、今回はどうにも手掛かりを掴むのが目的らしくてな」

「それで、お前らの中で一番勘がいいやつは？って聞いたら刀太だつてエヴァンジエリンが言うんでね」

「もしかして、勘頼りなのかよ！？」

あまりの調査方針に愕然とする刀太。

「失礼な。一応の目星はちゃんと付いてる。ただ範囲が広い上に情報のノイズがひどくてだな……」

「ノイズ？」

少し聞きなれない言葉に首を傾げる。

なんでも、匿名性のおかげで情報発信に躊躇いがなくなることでデマが多くなるのだという。そして、真実を語っている情報は一握りも無いことが多いので、余計な情報のことを指して雑音——ノイズと言うのだとそうだ。

「へえ。んで調査する範囲はどのくらい？」

「東京」

一体どこの遠方かと身構えていると、案外近くて肩透かしをくらつた気分になる。

「なんだ、結構近いじゃねえか。んで、東京のどこだよ？」

「いや、だから東京だつて」

「……へ？」

黒斗の言つている意味が分からず、思わず聞き返してしまう。

「東京の全域が、今回の調査対象だよ」

まさかの広域調査。とても一日で終わるとは思えない。

「あ、言つておくけど、調査が終わるまでは俺の方に付いて来てもらうからな」

「ち、ちなみにその間修行とか給料とかは……」

せめてもの希望を見出そうと聞いてみるが。

「いや、元気が残つてゐるなら修行は止めないけどよ」

そこで、ちらつと雪姫を見やる。

「調査の給与に関しては、  
なあ」「今日は組織として正式なものじやないから

言うと二ツコリ笑つて。

「出来高制だな」

現実を突き付けた。

卷之三

そんなことがあつた三日後のこと。

「たあ！くそ！何にも手掛かりかねえ！」

調査の状況は芳しくなかつた

おとづれ三種の園のヅノニニトヨリヅ

寂れた廻公園のベンチは座りながら項垂れている黒斗の姿はアリ姿も相まつてリストラされだサラリーマンっこ見えなゝ。

「つてか、調査つてこんなに大変だつたのかよ？」

黒斗のあんまりな様子に労うつもりで質問する。

だけどな

それが、足跡を消した痕跡すら見つからない。

プロなんてレベルじゃない。

そうしなければ生き残れない環境で身に付いたものだ。間違いな

レ

再び、過去のものゝ一筆の用間を除いて黒牛は余の保証など、他の三

物に比べたら微塵も無い。

例え瘴気が濃いところに居続けたとして、そんなところは決まって治安が悪い。トラブルに巻き込まれる可能性が大きいのだ。

しかも、トラブルで対峙した相手によつては一瞬で消されてしまう。

かと言つて、瘴氣の薄い場所には長期間居座ることすら出来ない。だからこそ、こと『生き延びる』ということに関する能力は黒斗の中でも随一なのである。

その黒斗と似たような鮮やかな手並み。いや、それ以上とも言える。

痕跡を消すだけでなく、消したことすら掴ませないのでから。

「なあ、黒斗。本当に東京でその組織、だつけ？そいつらの証拠とか本当にあるのか？」というより、そんな奴らいるのかよ？」

「いる」

当然の疑問に、黒斗は即答する。

「間違いなく、この東京で奴らの尻尾の先くらいは掴んでみせる」「けど、この三日完全に空振り三振どころか、このままじゃ<sup>パーフェクトゲーム</sup>完全試合だぞ？」

言われてへこむが、断言するだけの根拠がある。

「ぐつ……けど、ネットやら心靈スポットの口コミを見ると、確かにこの東京でも色々やつてるんだよ」

そう、実際に見て歩いた分には何にも分からなかつた。

気が付いたのも、たまたま黒斗がそうだつたからに過ぎない。

それに対し、ネットと口コミによる情報には当然ノイズもたくさんあつたものの、『幽靈騒ぎ』に関しての情報がここ最近にしては増えすぎていたのである。

「ただの幽靈騒ぎだつてなら、確実な目星つて言うには情報として弱すぎる」「

だけど、と一度区切つて。

「さすがに鎖付きの幽靈の話がここまで多いのは異常だ」「鎖……」

そのキーワードで思い出す。

二週間ほど前の除霊の依頼。

そこで戦つた怨霊が特殊な鎖を使い攻撃してきたこと。

何より、その鎖を使って浮遊霊から力を奪っていたこと。

そんな特殊な鎖を持つた幽霊が、自然発生でそこら中に現れるなんて堪つたものではない。

「でも、そんだけ分かってんのに何でこんだけ何にも掴めねえんだ？」

その一言で、ズーンと効果音が聞こえそうなほど落ち込む黒斗。さすがに心配で声を掛けようとする直前で勢いよく立ち上がる。

「ああもう!! とに何だつてんだよ!」この情報統制のちぐはぐ感はあ

!!

うがあ!!と叫び声を上げながら怒りを空に放つ。

「ちぐはぐ?」

引っ掛けた言葉を聞く。

「そうだよ。完全にこっちに尻尾掴ませないようにするんなら、今まで見てきた場所の足跡の消し方は完璧だ。けど、そいつに対してネットでの情報かく乱が適當つつかザルつとうか、もう完つ全にてんでバラバラなレベル差なんだよ! 遊んでんのか!? 煽つてんのか!! マジでよお!!」

説明の途中でまた怒りが沸いたのか語気が強くなる。

「まあまあ、ここで暴れたつて仕方ないんだから少しほ落ち着けつて」  
「…………わかつたよ」

刀太に諭されたのと叫んだことで少しは発散できたのか、一度冷静に考えてみる。

今まで見たスポットの数は百に近い。

その多くがノイズだろうが、それでも当たりはいくつかあつたはずなのだ。

それが全く分からぬほどの高度な痕跡消去。

なのに、ネットを突付けば簡単に候補を挙げられるくらいに情報が溢れている。

適当なノイズを混ぜていくだけで、追跡など容易に困難に出来るというのに。

しかもその場所は東京。

UQホルダーの目と鼻の先。

これはもう挑発でしかない、と黒斗は考へてゐる。

前に解決した事件の後すぐに、情報量が爆発的に増えたからだ。  
推測の域を出ないが、おそらく確定だろう。

(問題はこれがプライドの張り合いの結果か撒き餌か、だ)

前者なら、UQホルダーの力で簡単に叩き潰せるし、尻尾さえ捕まえれば後はするする芋づる式に出てくるだろう。

しかし後者だつた場合、これはいわゆる『釣り』だ。

今ここで黒斗たちがこうして悩んでいることさえ、相手には想定済みの織り込み済みでしかない出来事のはずだ。

「でもホント。これが狙いでやつてるつてなんなら、相手は絶対DSDだな」

黒斗の言葉に同調するように頷く刀太。

「だな。マジで嫌がらせの天才としか思えねえ」

疲れた感じに笑いながら、次の場所に行こうと立ち上がつたところだ。

「サディストではない。ただの恋慕である」

後ろから、声と共に殺氣が放たれた。

ゴツいおつさんのストーカーとかないわあ

.....

ねえ、見てる?

私のこと、考えてくれてる?

想ってくれてる?

ようやくあなたに会える。

あなたを迎えてあげられる。

このお話は、全部あなたのため。

あなたと私の喜劇のお・は・な・し。

.....

「ザディストではない。ただの恋慕である」

声がした瞬間には、黒斗は全力で前へ。

刀太はいつの間に取り出したのか、剣を構えて防御の体制に。  
ガキン!!

「うおっ!?

武器がぶつかり合う金属音が響いて刀太が少し飛ばされ。  
黒斗が躊しきれずに、身体を一部持つていかれた。

「がつー…………くそつ!!」

そこから血は流れず、靄が漏れる。  
即座にコントロールして姿を保つ。

「うむ」

声の主は上出来だと言わんばかりに大きく頷く。

睨みながら振り返ると、そこに居たのは一メートルに届くという  
長身で、力士並みの体格を持つた大男だった。

男は、その身の丈にあつた大型の戦斧いくさおのを肩に担いで告げた。  
「黒い靄で出来た男……貴様がバーナビー・ブラックだな」

!!

躲しきれなかつた事実より、真昼間から襲つてきた事実より。

何より、その名前を知つていてことに衝撃を覚えた。

「……俺は、そんな名前じやあねえよ」

一応否定するが、この人通りが少なく瘴氣の濃い寂れた廃公園で襲われたことを考へると無駄な抵抗でしかないと分かつてはいる。

「そうか、そういえば確か……もやかさくると 露傘黒斗くろかさ、と現代日本の名前を使つていのだつたな。加えて日本では、黒傘くろかさの霧男きりおとことして、貴様の怪談話があつたはず」

否定されたことに素直に納得し、情報をつらつらと挙げていく。

「あんた、相当な俺マニアだな？ ストーカーとか見た目考えろ。気持ち悪いぞ」

皮肉を織り交ぜて伝えると、不機嫌そうに鼻を鳴らす男。

「ふん。我是貴様のことなど知らん。だが、執拗に言われば嫌でも覚えてしまうものだ」

「なるほどねえ」

会話をしながら、相手の言葉から情報を掴んでいく。

（直接俺を知つて襲つてきたわけじゃない？……ならこいつはただの使い走りつてどこか？それにしても、こいつの後ろにいる奴の素性が知れないな）

しかもバツクにいる相手はイギリス時代の黒斗の名前も、室町や江戸の日本で活動していたことも知つていて。

ならば正体はおそらく不死者かそれに連なる超長寿命の人外だろう。

（後は、こいつに出した指令とその意図が問題か……）

はつきり言つて、イギリスを中心に活動していた不死者で黒斗のこととを欠片も知らないものなど皆無だ。

だからこそ、どういう因果かは分からぬが目を付けられることも不本意があつても不思議はないと思つてゐる。

「我が主から、貴様を滅せよと指令を承つたので馳せ参じた。私情で悪いが、断たせてもらう！」

「ちつ、やつぱりそういう系かよ！」

振り下ろされた巨大な戦斧を全力で後ろに飛んで何とか躱す。

地面が大きく碎かれるが、そんなに重量級の武器を思いつきり振れば当然隙になる。

「黒斗はやらせねえぞ！」

その隙を逃さず、刀太が斬り込む。

脇腹に一閃。

ガキイ！

しかし、戦斧の柄に遮られて強襲失敗。

だがそれだけで諦めるわけもない。

瞬動術で高速移動をしながら攻撃を絶え間なく続ける。

重たい武器相手なら必勝の手だ。

そのはずである。

なのに。

(嘘だろ!?こんだけ重い武器使つて攻撃に追い付いてる!?)

男は、高速で動く刀太相手に攻撃に転じることこそ出来ないが、確かに防ぎ続けていた。

細かく動かし、柄も使つているがそれでも追い付いている。

魔法を使っている様子もない。

驚きと、尊敬の念を刀太は抱いた。

と、大きく弾かれて刀太が後ろへ大きく下がる。

「くっそ。世界は広いなあ」

「関心してる場合じゃねえつつの！」

言つて、今度は黒斗と二人で仕掛ける。

「む！」

先ほどの刀太の戦闘に黒斗が加わるだけで、流れが大きく変わる。

男の攻撃は数度だけいなされて、出だしをコンマ数秒遅らされ、自由な動きがほんの少しあとはいえた。

それしか妨害出来ないことは、当然男の実力が高い次元にあるからであり、普通なら歯牙にも掛ける必要はない。

だが、今展開しているのは高速戦闘。

少しのズレが、大きな結果を生む。

「当たりいいい!!」

その攻防の結果、足下に潜り込んだ刀太が男の右太ももを思いつき  
り斬りつける。

「ぐつ!」

堪らず男は膝をつき、全力で斧を大振りして二人を後ろに下がらせ  
た。

「ちつ、畳み掛けたかったんだがな」

「けど、足にダメージは与えたからな。さつきよりは状況は良くなつ  
てると思うぞ」

悔しむ黒斗と、やる気をどこまでも燃やす刀太が男に回復させまい  
と再び仕掛ける。

だが。

ビュオ!!!

つい一瞬前とは違う武器の速度に、一度止まらざるを得なくなる。  
「やつこさん、ようやく本気ですってか?」

「マジかよ」

言葉とは裏腹に、不敵に笑う二人。

しかし、立ち上がった男を見て驚愕に歪む。

「てめえ、そりゃあ……」

「どうなつて……?」

男の太ももからは血が流れておらず、パツクリ割れではいるのだが  
そこにあるべき肉が、骨が、一切見えなかつた。

「ぐぬ……」の剛僧こうそう、一生の不覚

悔しそうに立ち上がる男——剛僧には、明らかにダメージが入つて  
いる。

しかし、本来あるはずの肉体が無い。

「まさか、黒斗と同じ?」

自分で発した言葉が信じられないが、事実目の前の相手の特徴は刀  
太から見た黒斗と合致する。

「んなはずはねえ。そんのがほいほい自然発生なんざする訳、あり

得ねえ

目の前の事実に、それでも否と首を横に振る黒斗。

「でも、こいつは——っ！」

意見を交わす暇もなく、剛僧が攻撃してくる。

先ほどよりも鋭く速い速度で振るう戦斧。

さらに増した攻撃力には、そう簡単に力のベクトルに干渉させても  
らえない。

「つそ、なら……『黒針』！」

黒針を精製し、雨のように降らせる。

その弾幕を、一度の攻撃で全て弾いてしまう。

その重たい攻撃は、余波ですら威力がある。

だが、そこで終わる黒斗ではない。

『黒荊』展開！

「む!?」

弾かれて、剛僧の周囲に散らばっている黒針が落ちる前にそれらを一度粒子状の瘴気に戻す。

すぐさま繋げて何本もの黒色の荊を形成。

それら全てを剛僧に絡ませて地面に縫い付ける。

「ぐ、この——」

「無駄だ。そこまで柔<sup>やわ</sup>に作つてねえよ」

何とか抜け出そうとする剛僧の腹に飛び乗つて構える。

「見極めさせてもらうぞ。お前の正体を」

言つて右の拳を天高く突き上げる黒斗。

ベクトルを見切る修行をしていた刀太には分かつた。

今、黒斗の右手に気力が限界を超えて集まってる。

剛僧にもそれが分かつたのか、さつきよりも必死に抵抗するが間に  
合わない。

溜めに溜めた気を、瞬動術の勢いを上乗せして。

重力に従つて、真下に。

放つ。

ドツツツ!!ゴガツ!!!!!!

放たれた強大な気は、剛僧に破壊の一撃をお見舞し、それだけに留まらず地面を大きく穿ち、クレーターを作るに至った。

「がつ!!」

剛僧は堪らず悶絶し、ダメージに動けずそのまま氣絶した。

しかし、死んではいない。

「こんだけやつて死はない、か……」

「いやいやいや！何で大真面目に殺そうとしてるんだよ!?」

さすがに殺しは看過出来ないので、大慌てで止める刀太。

「？殺そうとした相手を殺さないとか、自分が危険になるだけじゃねえか」

止めた刀太に本気で首を傾げる黒斗。

「いやいや、だからって殺しはだなあ……」

「あのよお」

それでも殺しを否定する刀太にため息を吐く黒斗。

あれ？俺そんな変なこと言つてないよな？と逆に首を傾げる刀太。

「俺は、お前と違つて死ぬんだからな？普通の命とは違うから長年生き続けられるだけで、不死性そのものは俺は誰より、むしろ生き物よりも弱いんだぞ？俺は」

その言葉に、少しだけ重みを感じる。

そうやつて命が失われる危険性と四六時中隣り合わせで生きてきたからこそ培われてしまつた価値観。

黒斗の言い分は、極論だが間違つてはいない。

しかし、それを許容するかは別の話。

「でも、今回は俺もいるし、撃退で済むならそうしようぜ？」

刀太の提案は、黒斗のそれと比べれば甘ちゃんの考え方でしかなかつた。

けれど、受けないつもりは無い。

「それで済めば、俺は何でも構わねえよ」

黒斗だって、何も好きで殺しをやつていたわけではない。

自分の命が危険に晒されて、相手の命を奪わなければ生き残れない選択のみ迷い無く選んだに過ぎないので。

これでも、あの意外とお人好しの雪姫と息が合っている黒斗である。

そんな黒斗もまた、周りに比べればドライな方だがある  
UQ<sub>人好し集団</sub> ホルダーの一員なのである。

刀太の提案に頷いたところで、意識を剛僧の方に戻す。

「にしても、こいつは本当に黒斗の同類なのか？」

「誰もんなこと言つてねえよ……」

刀太の解釈にため息で返す。

黒斗はこう見えて正真正銘天然の特別製だ。本当に、神の氣まぐれとしか言えないような偶然と奇跡が重なって出来た存在なのである。だからこそ、存在感は生物に比べて薄いし、迫力や貫禄なんかも普段は全く感じない。

それに比べたら、この剛僧という男は威圧感のようなものを受けるし、存在感もはつきりしている。

ではなんなのか？

「刀太、こいつを見て何か感じないか？」

黒斗から質問され、よおく目を凝らす。  
じつと見ても全く分からない。

けれども、ふと目に入った戦斧を見て違和感を感じた。  
(あれ？ 何か、これ……)

「斧の方が、存在感が強い？」

見て思つたことが口から出てきた。

「そうだ」

正解の答えに頷いて、断言する。

「こいつの本体は、この戦斧だ」

痛くて熱くて苦しいのは如何？

自分には生命が無い。

残り少ないなどではなく、最初から持つてない。  
けれど、そんな自分なればこそ。

命への憧れは誰より持つている。

だから、命を愚弄することを許さない。

例え、どんな生命でさえも。

そう、僥くも信じている。

……

「どういうことだよ？こいつの本体が斧つて」  
黒斗の発言の意味が分からず、尋ねる刀太。  
「そのままの意味だ」

それに対し、さらっと答えを返す。

「さつきの一撃。間違いなく殺しきるつもりで放った」

その言葉に、おいっ!?とツッコむ刀太。

「なのに、手応えが変だつたんだ」

「変？」

首を傾げる刀太に、ああと頷いて続ける。

「なんと言ふか、芯を捉えてなかつた感じだ」

それは、確かに変である。

男を動けない状態にして、強大な気をぶつけたのだ。

多少外したとしても、その感覚が全くないのは確かにおかしい。

「けど、斧が本体だつたとしてこいつは一体……？」

「なんだ、刀太。お前知らないのか？こういう存在

こういう存在？とおうむ返しに聞く。

すぐに黒斗が答えないでの、必死に頭を悩ませる。

「んくく？」

「ほら、大事にされたり長年使われたりすると物が成るつていう……そこまで言われてようやく分かつたのか、ポンと手を打つて答える。

「ああ、もしかして付喪神か？」

大きく頷く黒斗を見て、それが正解だと分かる。

長年使われたりして古くなると、それを依り代に神や霊か宿るという怪談である。

鎌倉時代に始まり、江戸時代には物を大事に使うために描かれた妖怪もある。

そういうつた付喪神であることが分かつたのはいいのだが。  
「けど、なんかこの斧、新しくないか？」

「よく分かつたな」

まあな、と得意げに答える刀太を見て勘が優れているという雪姫の評価に納得した。

とはいえた心だけしている場合ではない、と話を続ける。

「問題はそこでな。この斧は新し過ぎる。はつきり言って、付喪神に成るほどじやない

「じやあなんで？」

刀太の疑問に、表情を少し歪めて即答しない黒斗。

事情は考えられるが、その答えを出来るだけ認めたくない、と言いたげに、刀太は感じた。

「なあ、黒——」

「そうだ。私は付喪神に成るために『造られた』存在である」

刀太の声に被せるように剛僧の声が響き。  
はつ、とした時には、既に黒斗の目の前に斧が迫っていた。

避けられない。

そう判断して身構える黒斗の前に、刀太が飛び込む。  
刀を地面に挿して、ダイヤルを回す。

「『万倍！十<sub>t</sub>剣』!!」

ゴツ！

剣が急激に重くなつて、地面に衝撃が走る。

相手より重くなれば、力が伝わりづらくなつて防ぎやすくなる。  
先ほどまでのぶつかり合いで、この戦斧が何万<sub>t</sub>もの重さではない  
ことは感覚で理解している。

故に防御に出たのだが。

「バッ！受けるな、流せ!!」

黒斗の切羽詰まつた声が聞こえ。

ドツ!!

二人一緒に吹っ飛ばされた。

幸いにも大きく体制を崩すことなく構え直す二人。

「私は負けられん。それすなわち我を造り賜たもうた恩義を果たせないも  
同義！」

その必死の形相にその言葉が欠片の冗談も含んでいないことが分  
かる。

「それは我的意義が無くなること！故に、貴様には消えてもらうぞ!!」  
それから、剛僧の猛撃が始まった。

「つそが！」

嵐のような攻撃に、自分の間合いで入れさせてもらえない黒斗。  
刀太も中々踏み込めず、何度もかかち合うも弾かれてしまう。

一言で言えば隙がない。

言うは易しだが、刀太と黒斗。UQホルダーのナンバーズと、それ  
に連なる強さを持つた二人を相手に実行するのはとんでもない話で  
ある。

「だつ！」

そこへ、再び超重量の一撃を入れる刀太。

さしもの剛僧も、自分より何倍もの重きの一撃には一瞬剣速が落ち

る。

「そこだ！『黒針』！」

その一瞬を逃さずに黒針を打ち込む。

腕に二本刺さるがそれ以外は躲すか、弾かれてしまった。

「ちやちな攻撃など、今更関係ないわ！」

だが、当然構わず攻撃を続ける。

そんな剛僧に刀太は勝つたと思つた。

黒斗の黒針は刺さることで、強力な幻術のトリガーとなる。

その強烈さはつい先日味わつたばかりだ。

だからこそ、必ず剛僧に隙が出来ると判断した。

その瞬間、刀太は油断してしまつたのだ。

「馬鹿、氣い抜くな!!」

その叱責にはつとして瞬動術で離脱しようとするとする。

しかし、その直前で剛僧の戦斧が刀太を捉える。

ザシユツ！

「ぐああああああああああああああ!!!」

鈍い音と共に、刀太の背中が抉られた。

背骨が破壊されたのか、まともに立つことも出来ない。

「つの、ド阿呆が！」

即座に回収して、一度距離を開ける。

「すま、ねえ」

（しゃべるな。今から重要な話を一瞬にしてやるから）

身体は回復し始めているが、このままでは最長で一分ほどは掛かるだろう。

さすがに黒斗も抱えたまま戦闘は厳しいので、ほんの少しの時間で必要なことを全て伝える。

（確実に奴を止めるために、俺の針をせめてあと二本、出来れば武器の方にも四本で計六本刺したい）

伝えられた内容はかなり厳しいものだつた。

今どうにかこうにか二人掛けで何とか二本刺せたのだ。

それを後六本分、しかもそのうち三分の二もあるの武器の方に刺す必

要があるときだ。

（お前は回復に専念して、タイミングを窺え。それで、何とかまた決定的な隙を作つてほしい。それまでに、必ず奴の身体には針を刺し終えるから）

無茶な要求なのは分かっているが、それでも今のままでは勝機が見えない。

だから、刀太は力強く頷く。

それを見て、古びた遊具の後ろまで飛ばす。

「休んどけ！クソ馬鹿！」

ちゃんと、黒斗と剛僧の戦闘の直線状かつ黒斗の後ろ側という配慮付き。

刀太に止めを刺せるかどうかは置いておいて、攻撃を与えるために黒斗が邪魔だ。

加えて、剛僧の目的は黒斗のみ。

ならば剛僧としても、刀太が回復する前に叩くのみ。

「ぬううりや！」

余波すら必殺になりかねないほどの一撃を見舞う。

「！」

だが、気付いた時には黒斗が自分の刃圈の内側——すなわち武器の持ち手の更なる内へ入っていた。

「だらつ！」

腹にもろにクリーンヒット。

剛僧の大きな体躯が少し浮いて、数メートル吹っ飛ばされた。

「ぬう！」

しかも見れば、腹にまた一本針が刺さっている。

だが、抜く隙は与えてはくれない。

一瞬で黒斗は剛僧の顔面に蹴りを放つ。

剛僧としても、そう何度も当たるつもりはない。逆袈裟斬りの要領で、斧を振るう。

これに対し、黒斗は空中にいながらバク宙。

そのまま、思いつきり戦斧を蹴りつける。

気力を集中させて放つたそれはどうにか黒斗を逃し。

針が一本、刺さっていた。

「ほお」

その威力に一瞬心から感心する。

剛僧の本体である戦斧は当たり前だが自分自身。

その頑丈さには自信がある。

だから、例え針一本でもそれを貫いたことは素直に賞賛できる。

だが、それでもやることは変わらない。

黒斗は全力で蹴った代償として、体制が大きく崩れてしまつてい  
た。

そのまま地面に尻餅をついてしまう。

チャンスは逃さない。

それまで以上に強く踏み込み、絶対的な必殺の一撃を与えるべく。  
一閃。

ガキン!!

しかし、それは誰かに阻まれてしまう。

いや、そんなことが出来る者などこの場に一人しかいない。  
刀太だ。

下から潜り込み、救い上げるように刀を持ち上げる。  
斧のベクトルに対し、ぶつかり合うのではなく、流す。

(刀太こいつ！まさか、もう流れの変化をやつてのけるのかよ!?)

それを見た黒斗が驚愕する。

力の流れを変化させるには、相手の流れに同調してその方向を把握  
して自分のベクトルを相手に合わせ、相殺の時のように力が乗る前に  
意図した方へ狙いをつけてその流れを変える必要がある。

すなわち、変化をまともに行うには流れの同調と相殺、この二つの  
要訣を実行することが不可欠なのだ。

それをたつたの数日で行つた刀太。

正直、戦慄した。

「ぬぐ、こやつ……！」

「おつづつらあああああああ！！」

完璧に剛僧の一撃を捉えて流したベクトルは、綺麗にその方向を十数センチ上に逸らし。

盛大に空振りさせた。

それを驚いた程度で見逃す黒斗では、もちろんない。

「全く大した奴だよ、お前は」

剛僧の肩を踏みつけて一本。

振りぬかれた戦斧に、踏み抜くつもりで強く着地しながら一本。真下に向けて思いつきり殴り付けてもう一本。

止めに踵落としで地面に叩きつけながら、さらに一本の針を刺す。これで剛僧の身体と本体である戦斧に四本ずつ。

計八本。

準備は整った。

「さあ、見せてやる。殺し用幻術、『黒針地獄巡り』フルコースで味わいやがれ！」

パチン、と指を鳴らすと、剛僧の身体に刺さつた物と戦斧に刺さつた物の二本が溶けるように消えた。

そして幻術が発動する！

『其の壱 一骨

発動したが、剛僧としては何の変化もなく首を傾げる。

「一骨は骨や間接に影響を及ぼすんだが遅効性でな。最初は風邪を引いた時の関節痛くらいのものでしかない」

言われた通り、少し間接部分に違和感が出てきた。  
「だが、こいつが効いてくると……」

「ばきべきどき!!

「うつ！」

「全身の骨が碎ける感覺と共に、息が詰まる」

今度は両手を合わせるようにして拍手のように強く叩く。

『其の式 煮式』

またそれぞれ二本が消え、今度は全身を灼熱の痛みが襲う。

「があああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

その激痛に堪らず叫ぶ。

「全身を煮込まれる痛みに耐えかね、身体中の空気を全て吐き出す」  
さらに合わせた手を開き、指を間に入れて祈るように握る。

『其の参 惨苦』

再び一本が消え、幻術が続く。

「ぐつー！ つつつつつつ！」

心臓がきゅう、と絞まる感覚が襲い、肺や腸が収縮し、逆に胃や脳が膨張したかのように感じる。

「心臓を始めとする臓器全てに苦しみが襲い、息を吸うことも困難になる」

そして握った手を、弾くように勢いよく解く。

『其の肆 死送』

唱えた瞬間、最期の二本が消えて。

剛僧の身体が弾け、戦斧が粉々に碎けた。

しかし、これは幻術。

刀太からは、ただ剛僧が倒れたようにしか見えない。

「最後に、自分が死ぬ強烈なイメージを魂に届かせるほど叩きつける」

黒斗は肩から力を抜いて、自然体へ。

「生きてる奴なら、最後の死の幻覚でショック死確定だ」

得意気に言つて、ゆっくり剛僧に近付く。

「如何かな？俺の幻術フルコースは？ つて、もう反応出来ないか」

剛僧は氣絶よりも深く、沈黙していた。

勝敗が、決した。

絵面のシユールさを「想像下さい

こう。

この言葉にどれだけの感情が込められているか。  
知る者がどれほどいるだろう。

悲しみ、怒り、苦しみ。

そして、恋慕と狂喜。

それらが混ざり合つて、壊れてしまうほどの激情となつて。  
溢れ出てくる。

そんな感情を、経験した者がどれほどいるか。  
とはいえ、言葉で言うのは存外簡単だ。

“あなたに会いたい”

結局は、ただそれだけのことなのだから。

……

「あ、疲れた」

伸びをして、座り込む。

もう、地べたとか汚るとかどうでもよくなるくらいに疲れたの  
だ。

「それで、こいつどうすんの？」

刀太も疲れた様子で、地面に置いたままの戦斧と剛僧を指差す。

「まあ、置いとく訳にもいかないから。うちで引き取つて——」

黒斗の妥当な意見が、最後まで話されることはなかつた。  
なぜなら。

ビシイツ!!

戦斧にひびが入つたのだ。

「ぐ、がああ！」

苦しそうに呻いて意識を取り戻す剛僧。

「おい！大丈夫か？！」

心配して駆け寄る刀太。

剛僧は付喪神。

斧が壊れなければ死にはしない。

逆に、斧にダメージが入ればそれはそのまま死に繋がる。

黒斗はそれを分かつていて、直接攻撃ではなく殺し用とはいえ幻術を使つたのだ。

しかしさか、こんなに早く目が覚めるとは思つても見なかつた。何より、いくら戦斧を攻撃したからといつてこれほど簡単に碎けることなど有り得ないはずだ。

その程度の判断くらいは付いている。

なのにひびが入つた。

その要因が剛僧でも、刀太でも、黒斗でもないのなら。それは外部からしかない。

「があつあああ！！」

ひびが大きくなり、叫び声がより大きくなる。

刃の中心辺りがどんどん割れていき。

バカン！

中から、淡い紫の球体が飛び出した。

「がはっ！」

その球体が抜け出たからか、ひび割れが止まり少しだけ息を吐けた剛僧。

その様子に、心配はなくならないが少しだけほつとする刀太。

『（さ）きげんよう』

しかし、球体から女の子のものと思われるその声が聞こえた瞬間、鳥肌が立つて收まらなくなつた。

黒斗も同様で、警戒心を限界まで上げる。

声が聞こえた瞬間に分かつたが、この球体から感じる禍々しさは異常だ。

それこそ、下手をすれば水無瀬小夜子にも匹敵するくらいの。

警戒して、油断もなく、戦闘態勢すら無理矢理にでも整えたのに、冷や汗が止まらない。

黙つていると焦れたのか、再び球体が話しかけてきた。

『「きげんよう。無視しないでよ、バーナビー』

どうやら、目の前の球体は黒斗に話しかけてきているらしい。

「……てめえ、何者だ？」

プレツシャーから、最低限の言葉で必要なことだけを聞く。

普段の黒斗なら、軽い挨拶でもしだらうが、その余裕すら奪うものをこの球体は感じさせ続けている。

『全くもう、紳士のくせに女性に挨拶も出来ないの？』

ぶんすか、という様子が手に取るように分かる言い方に、選択をミスつたかもしれないと思った。

感じは禍々しいが、どうにもフレンドリーなのだ。

それでも警戒は解けないのでどうしたものかと悩む。

相手がフレンドリーでも、冷や汗が止まらないほどのプレツシャーが放たれていてはそう簡単に判断出来ない。

『まあ、いいわ。どうかしら？ 気に入ってくれた？ バーナビー』

やれやれ、と言いたげな声。落胆はしているようだが、気に障るほどではなかつたらしい。

「何をだ？」

本当に意味が分からず聞き返すと、笑い声が返ってきた。

『何つて決まつてるじやない。その人工付喪神よ。よく出来てるでしょ？』

「はつ、この技術は一応は確立された技術だ。これだけじゃ、驚くに値なんざしねえよ」

挑発気味に黒斗は言うが、驚かないのは正直無理があつた。

確かに、武器に意思を持たせる研究はされていて、その結果の一つに付喪神に成りやすい武器の精製があつた。

けれど、そう易々と出来る代物ではないし、出来たとしてそれは『より付喪神に成りやすい武器の精製』であり、『必ず付喪神に成る武器の

精製』ではない。

だが、この球体の口ぶりからすると、確実に付喪神に成ると分かつて造りだしたように聞こえる。

これを黒斗はある程度ブラフと判断。

確率を大幅に上げることに成功したくらいに考えることにした。それでも、本音で言えば十二分に驚嘆に値する技術力ではある。

『あら、残念。もう少し喜んでくれると思つていたのに』

「俺への理解が足りてないな、ストーカー君。つてか、俺を喜ばすつて言う割には、こいつに俺を殺すように指示してたじやねえか。何でだ？」

少しだけ慣れたのか日常会話のように口調を軽くしていく。

どうにか相手の気を良くするためである。

黒斗の予想では、相手はこの付喪神に自分を殺せと指示した本人のはずだ。

でなければ、付喪神の本体に魔法を仕込むなんてそうそう出来ることではない。

だからなんとか気分をよくして、向こうから話させるつもりなのだ。

『ストーカーなんて、私傷付いやうわ』

だが、不用意に発言してしまった言葉に、本気で肩を落としたような口調で返される。

(ヤバ……詰んだか、こりや?)

「そつは言つても、俺の昔の名前だの日本での活動だのを細かく知つてたらそつても仕方がないだろ」

およよ、と嘆く球体に内心焦りながらも文句を言う黒斗。

黒斗が緊張を張り詰めた中でどうにかそれっぽく会話をしているのに対し、球体の方は完全にこの会話を楽しんでいる。

話の流れがさっぱり分からぬ刀太にも、相手がおしゃべり感覺なことは分かるくらいだ。

『もう、久々の会話なのにせつかちね、バーナビーは』

(?久々、だと?)

それが本当なら、黒斗とこの球体——正確にはこれは通信魔術の一種のようなので声から察するにその少女——は、やり取りの軽さから、黒斗の知り合いになる。

しかし、黒斗の記憶ではこんな過激な少女のことなど知らない。

「一体何者だというのか。」

『まあ、いいわ。答えてあげる。理由は簡単よ』

ふわり、と戦斧の周囲を一周して告げた。

『それ程度じゃあ、あなたを殺すなんて不可能だから指示したの。挨拶代わりにね』

「結構危なかつたんだが……」

実際、刀太がいてくれなかつたらもつと厳しかつたと思うし、下手をすれば消滅していただろう。

『そんなはずはないわ。決してね』

だが、その危惧を声の主は一蹴する。

『私が愛したバーナビーが、こんな程度だなんて有り得ないわ』

「……なるほどね」

何となくだが、理解した。

この声の主が言っているのは、全盛期の黒斗の話だ。

その時の黒斗なら、確かにここまで苦労はしなかつただろう。

それは確かだ。

しかし今となつては、それは過去でしかない。

過去の強さは、決して今の実力とイコールなどではないのだから。

「悪いが買い被りだ。今の俺にそこまでの力はねえよ」

『そう』

その答えに、声の主は残念そうに呟く。

「それと、その名前もやめてくれ。俺は今、UQホルダーの靄傘黒斗なんでな」

それだけ伝えると、声の主が少しだけ沈黙する。

『……………そうなのね……やつぱりあなたは、あの女に……!』

静かに呟かれた内容はよく聞き取れなかつたが、そこに込められたどす黒い感情だけは伝わってきた。

その、つい溢れ出でしまつた程度のはずの力の奔流に、刀太と二人、  
身体が強張る。

そこに、計り知れない力を感じた。

不死人として最高位の吸血鬼である刀太と、悪い魂の欠片で出来て  
いる黒斗の二人が、戦慄だけでなく少しの恐怖を抱いてしまうくらい  
には。

『今日はもういいわ』

いつまでも続くと思うほどの圧倒的な圧力が、ふっと止んだ。  
止まらなかつた冷や汗が、ここにきてさらにどつと流れる。

予想以上に、身体が強張ついたらしい。

『けど、覚えておいてね？バーナビー。あなたを手に入れるのは私』  
宣言するように告げる。

『あなたを真に愛せるのも、あなたがまともに愛せるのも、私だけなん  
だからね』

しかし、告げた言葉は黙つていられるものではなかつた。

「てめつ、本当に何者……!?」

何故その事実を知つてゐるのか、そう詰問しようとする黒斗だが球  
体は空高く昇つてしまつてしまう。

「お、お待ち……ください」

と、そこへ剛僧が声を掛けた。

「おい、おつさん！しゃべんな、身体に障るぞ」

刀太の忠告を無視して話しかける。

「わ、我は何のために？我は、一体？」

自分の存在意義はこの声の主のためにある。

そう信じて疑わなかつたのに、話された眞実は自分は當て馬でしか  
なかつたということ。

そして、信じていたのは自分ではなく殺せと言つたはずのターゲッ  
ト。

自分の芯が、壊れていくのを感じる。

『ああ、あなたの役目はもう終わりよ？だつて、私をバーナビーに会わ  
せることだけがあなたを使つた理由だもの』

その残酷な言葉は、容赦なく剛僧を崩していく。

「！やめ——」

声の主が発しようとしている言葉の危険性に気付き、やめろと言う黒斗だが、その言葉を言いきるより早く。

最期の言葉が剛僧に届けられた。

『あなた、もう用済みよ』

それが決定打。

付喪神とは言うが、乱暴に言つてしまえば意思が宿っている道具に過ぎない。

道具は用途という名の使命があつてこそ。

それを奪われるというのは、何より屈辱で最大のダメージとなる。パツキイン。

その音を最期に、戦斧はバラバラに割れ。

剛僧が消えた。

ここに、人工的に造られた付喪神が一体。

死んだ。

今も昔も調べ物なら図書館で

……

甘い幻想に浸るのは悪いことなのだろうか。

現実では実現出来ないことを幻想に託すのは。

辛い現実から目を背ける間だけでも、許されないのか。

いや、本当は分かつていてる。

悪いなんて話ではない。

幻想に逃げて現実に立ち向かうことを止める。

そんなことを許容など、出来るはずがない。

誰かのためにも。

自分のためにも。

……

刀太と黒斗が調査している間。

夏凜もまた、水無瀬小夜子の件について調査を進めていた。

今は図書館にいる。

水無瀬小夜子が、世界を滅ぼすに至ることが出来たその足跡や積み重ねてきたこと、良し悪しに関わらずその研究成果などを調べている。

特に、不死者にも有効な魂魄浸食型屍鬼ウイルスについてだ。簡単に言えば人をゾンビに変える猛毒である。

調べているのは、水無瀬小夜子が成仏した今、そのウイルスは既に完成して何処かに保管してあるのか。より重要なのは他の者がそれを使用出来るのかどうか。精製出来るかどうかである。

おそらく、自分には効かないだろうが、だからと言ってそれでいいなんてことは絶対にない。

また世界が滅ぶなんてことにならないためには、ウイルスが使われる可能性をゼロにしなければならない。

そのためならば、いくらでも調べてやる。

覚悟を持つて、誇りを持つて調査に臨んでいるものの、成果は芳しくない。

それは、滅んだものをキリエの能力でやり直してこの世界が一度なかつたことになつたからなのか、学園での水無瀬小夜子の殺害記録以外は、『トイレの小夜子さん』という怪談話くらいしか出て来ない。

彼女と関わりの深かつた三太に聞いても、それらの詳しい情報は、さすがに出てこなかつた。

（本当にこれで大丈夫ならいいのですが……）

これが杞憂に終わることが一番だが、杞憂であると確認が取れることには安心出来ない。

今一度気合いを入れて、新しく本を取つて来ようと立ち上がる。ふらあ。

しかし、その瞬間に立ち眩みをしてしまつた。  
けれども、そんな体調不良など文字通り瞬しゅんで治る。

神に愛された身体は伊達ではないのだ。

そしてそのまま本棚の方へ歩き出そうとして、その進路を遮られた。

「駄目だよ夏凜ちゃん。少しは休まなきゃ」

犯人は一空だ。

ここ数日、己の不死性に任せて一睡もしていない夏凜を心配したことだろう。

いくら肉体的に健康でも、精神はやつれる。

身体が完璧である夏凜だからこそ、精神的ダメージはそのまま弱点なのだ。

「大丈夫です。この程度、何ともありません」

しかし、強情にも一空の忠告を跳ね除ける。

そうやつて無理をする理由には、一空も心当たりがある。

「黒兄くろにい」

その言葉に、動かそうとした足が止まる。

「いやあ、僕知らなかつたよ。夏凜ちゃんと黒兄がそんなに親密な仲

だつたなんて

「何が言いたいのですか？」

楽しそうに笑う一空とは対照に彼を睨む夏凜。

だが、怖くなどない。

何故なら、夏凜の行動の理由がよく分かるから。

「夏凜ちゃん、よつぽど黒兄が大事なんだね」

「一体何のことですか？」

夏凜の雰囲気の温度が下がる。

一空の言葉が、この前あんな対応されたのに、と言外に語っているからである。

確かに、数日の前の黒斗の発言には隠しきれないほどのショックを受けた。

だが、言われた内容に関しては当たり前のことでもある。

『あの頃』とは違うのだ。

甘えていい段階など、とうに過ぎている。

そして、自分と黒斗との関係は、既に修復不可能なほどに終わっているのだから。

……久しぶり過ぎて不覚にも忘れていたが。

だから、今調べていることは昔のことなど関係ない。

そういった意味を込めて聞き返した。

「だつて、そこに広げてる新聞つてこの前黒兄が言っていた泥棒事件についての奴だよね？」

ピク、と一瞬眉を動かして。

ヒュバツ！

文字通り光速と思えるほどのスピードで証拠隠滅。

「何のことですか？」

そしてしれつと答える。

白々しいのは百も承知だが、それでも認めてはまた何かこう、ニヤニヤ笑われるに決まっている。

あれは非常に不愉快極まりない。

それに、実際休憩の読み物くらいに読んでいたに過ぎない。

「さすがに、その数の新聞紙を隠して白を切るのは厳しいんじゃないかな？」

夏凜の後ろには、辞書くらいの厚さにまで積まれた新聞紙があつた。

「…………」

黙つてはいるが、本当に休憩中に読んでいただけだ。

数日間徹夜の調査での休憩に、だが。

「無理したら、黒兄心配するよ？」

一空に言われて、少しイラッとする。

そんなことは言われなくとも分かつている。

そう言おうとしたが、口を開く前に閉ざしてしまう。

——もう、俺は『違う』

別れ際の言葉が脳裏をよぎる。

その言葉は、頭から冷水を掛けられたような衝撃と、昔のイギリス時代での生活を思い起こさせ。

決して忘れてはいけない出来事を思い出させた。

あの時に、自分は希望と夢が奪われた。

否、奪つてしまつた。

その事実は、夏凜に重くのしかかつている。

三百年経つた今でも、だ。

どれだけ後悔しても捨てられない、希望を持ちながら。

「それで、どれくらい分かつたの？」

何も答えない夏凜に痺れを切らしたのか、話題を変える。

「いえ、水無瀬小夜子のことは何も」

「いやいや、黒兄の案件の方だよ」

何を言つてるのかと言わんばかりの一空に、少しむつとする。

「調べる必要はあるでしょう？ 何せ、世界が滅んだのだから」

「なかつたことになつたけどね」

だから良いなどとは言えないし、言つてはいけない。

その可能性を潰すのは、UQホルダーとしても必要なことだからだ。

「けど、今は何も問題ないよね」

「しかし、可能性は捨てられない」

二人の主張は正しく、平行線を辿る。

当然一空だつて、その可能性が大きくなつたときには解決のために動くだろう。

しかし、今大丈夫であるならば既に発生している問題が他にあるのだからそちらに取り掛かるべきだと言っているのだ。

夏凜だつて、見過ごせないから並行して調べていたのだし、平行線になる意見以上の文句は言えなかつた。

ため息を一つ吐いて、夏凜は調べたことを報告する。

「黒斗の言つていた通りよ。本当に、日本全国から武器だけじゃない。とにかく『力を秘めていたり』、『呪いが掛かっていたり』、『碌でもない噂を抱えていたり』する物を各地から盗んでいるわ」

言われた一空は、その意味や危険性について考える。

（そんなに色々集めたところで何が出来るんだろうか、今のところ特に暴れているとは聞いてない。……なら普通に考えればコレクションの線が濃厚のはずなんだけど……）

しかし、その考えが楽観的過ぎることは分かつていた。

報告で知つたが、その組織では怨靈に力を与えて靈力・魔力といったエネルギーを集めさせているという。

件の武器にそんなエネルギーを注入したら、どうなるか分かつたものじやない。

少なくとも、それが危険なのは間違いないと思われる。

「何でこんなことしてるんだろう？」

それでも、一空の頭からは疑問が尽きない。

それはその通りで、このような盗みのことも含めて止める必要はある。あるのだが。

けど、だから何だと言うのか。  
確かにそれは危険な行為だ。

力タギに手を出しかねない、つまりUQホルダーの理念を害する行為になるかもしない。

それはそれで充分に放つておけない問題ではある。  
かと言つて、目的がさっぱり見えない。

ただの破壊活動にしては何かしら組織的で目的有りきな行動に思  
われる。

わざわざ日本全国からそういう物を探し出し、盗む。

そして、その犯人は全く捕まつてはいないだろう。

力を持つていて、実行力もある。成功率もどんでもなく高いはず  
だ。

とはいゝ、それらもノーリスクということは有り得ない。  
なのに、特にそれ以上の行動を起こしていない。  
まるで訳が分からぬ。

「それが分かれば苦労はしないわ」

調べても結論を出せないのに苛ついてるのか、ぶすっとした態度で  
咳く夏凜。

「けど、そのうち狙われるかもしけない場所は一つ見つけたわ」  
その報告に目を丸くする一空。

「本当!? 夏凜ちゃん!」

詰め寄る一空を遠ざけながら、その予測地點を伝える。

「旧上野公園国立科学博物館——今は、国立海中魔法美術館。おそらく  
く、そこにある『呪具』が狙いよ」

そして、夏凜と一空が予想の結論を出した頃。

黒斗と刀太も、決着をつけていた。

(なんか、荒れそうだなあ……)

ロボットだが、嫌な予感の止まらない一空はそう思つた。

それは夏凜も同じようで、一空よりも少し複雑な光を瞳に宿してい  
た。

## 青空工作戦会議！

悪夢。

それはただの夢とはまるで違う。  
夢は醒めたら夢でしかない。

だが、悪夢は醒めてからこそ纏わりつく。  
文字通り、寝ても覚めても逃れられない。  
本当に厄介で嫌なもの。  
だから。

私がそこから救い出してあげる。

.....

国立海中魔法美術館。

様々な理由で海水の水位が上がったために、東京は約半分が水没。  
埼玉や千葉もその陸地を海の中に沈めていつてしまつた。  
だが日本とて、ただ沈んだ陸地を捨てるということはしなかつた。  
魔法を使える一部の者たちを中心に、海中都市の建造に着手。  
塔の真下を中心点に設定し実際に三十年もの月日を掛けて、都市としての機能を全うするに至つた。

その理由の一つに、文化的に損失させるわけにはいかない場所や施設がある、というものがあり、その保護・存続が真っ先に適用されたのが上野公園国立科学博物館というわけだ。

残念ながら当時の展示物は大半が水没してダメになつてしまい、展示内容を含めてごつそり入れ替えようということで話が進んだ。

そしてこの都市の建造にも使われた魔法技術に関する博物館にしようという結果になつた。

ちなみに、美術館と銘打っているのは、最初に掻き集められた展示品が美術的価値の高いものが多かつたことが理由である。

「という場所なわけだが……」

「誰に説明してるのよ？」

呆れながらツッコむ夏凜に、お約束だよと言つて話を続ける黒斗。実際、歴史の教科書を開けば必ず乗つてることなので、復習程度の意味合いしかない。

刀太や三太でもちゃんと覚えていたくらいなのだから。

「でも、一回行つてみたいくて思つてたからね。少しそくわくしてると」

そう言う一空はかなり楽しそうだ。

その言葉には何人かの面々も頷いていた。

「確かになく、でも俺はやつぱりあの塔の上に行きたいけどな」

刀太は長年の夢の場所でもある塔の上の方が優先みたいだ。

「おいお前ら、これから行くのは戦闘込みの任務なんだからな？ 観光じゃねえぞ」

注意する黒斗にはーい、と適当に返事してまた談笑に戻る。

黒斗も、つたく、と悪態をつきながら船の運転に集中することにした。

今、彼ら七人は海中都市に向かうためアジトの船に乗つている。

あの後、意氣消沈して帰つてきた刀太と黒斗。

その二人に敵組織が次に狙う可能性の高い美術館を告げると、二人とも妙にやる気を出して手配を完了させたのだ。

そうして学園にいた七人総出で呪具防衛任務のためにこうして現地に向かっているのである。

「それにしても、そう簡単に行くかしら？」  
「何がだ？」

キリエの質問の意図が分からず聞き返す黒斗。

「だつて、海中魔法美術館なんてそんじよそこらの警備なんて目じやないほど嚴重なのよ？ わざわざ捕まるリスクを極端に上げてまで来るかしら？」

「来る」

当然と言えば当然のキリエの疑問に、黒斗と夏凜が即答する。

「どんな警備とか関係なく各地から盗んでいるんです。警備が厳重だからと、そう簡単に諦めるとは到底考えられないわ」

「ああ、それもあるし……」

夏凜の言葉に頷きながら、黒斗が言い淀む。

言葉の続きを待つが、一向に喋らない黒斗。

「何か知らないけど、相手の狙いが黒斗だしな」

それに代わって刀太が話す。

「そ、それ、どういうこと!?」

その驚きの発言に九郎丸が問い合わせる。

他の者も同様に刀太や黒斗に詰め寄っている。

「どういうも何も、この間の調査中に俺らを襲った奴……いや襲わせた奴がそう言つてたから」

正直に答えると、夏凜の目がかなり獰猛な感じになり、黒斗を睨む。「何があつたの?」

「……別に、ちょっと色々あつただけだ」

少し気まずそうに目を逸らす黒斗。

それ以上詳しく話す気は無いらしい。

「…………まあ、いいわ」

全然よろしくなさそうだが、答えないのにいつまでも固執するわけにもいかない。

「それで、今回はどうするの?」

本題に入る。

今回は防衛戦。

しかも複数箇所だ。必然的にチーム分けをする必要がある。

「とりあえず、展示品のリストを見せてもらつたんだが……」

そう言つて、デジタル画面を表示させる。

「リストに書かれた特にヤバ<sup>げ</sup>氣な『いわく付き』の物品は十種類。そんな中でも付喪神に成る可能性が高い品は三つだ」

そう言つて三つの物品の資料を見せる。

刀と鏡、そして日本人形だ。

それぞれが人を殺すことに長年関わってきた代物だ。

刀は平成の世で悪い魔法使いに使われたもの。

鏡は三角縁神獸鏡。三角形の縁に乗せられた古代の鏡で、裏側に獸の絵が掘られた神聖な鏡である。この伝承には人の死をその鏡に予言する、その威光で直接人を殺したこともあるという少し曖昧だが、不吉な言い伝えがある。

最後の日本人形はありきたりに聞こえるかもしれないが、呪いの人形である。切つても切つても一晩で生えてくる黒髪は、少しだも人形を愚弄した者の首を絞め殺すと言われていて、実際にこの人形の持ち主が何人も死んでいる。

これら分かりやすくヤバイ物品が今回の防衛対象になる。

「思つたより少ないのね……」

少しホツとした様子のキリエ。

そこに、黒斗の補足が入る。

「いや、物そのものは少なくない。けど、全部は守れねえからな。他に比べて失いたくないもの、特に相手の戦力に変わるかもしないものに的を絞つたんだよ」

そこまで言つてキリエを見る黒斗。

「何よ?」

「一応聞いておくが、この判断は間違つてないか?」

念のために確認する。

もしかするとキリエ的には二週目以降の可能性もあるからだ。

なので用心のためにキリエには、出発前のアジトにセーブポイントを作つてもらつた。

「私も今回が初めてよ。だから確実なことは言えないわ」

しかし、まだ一週目の初チャレンジだと言う。

だから、この作戦が失敗するか成功するかは誰にも分からぬ。

「よし、ならこのままプランは変えない」

それを聞いて、作戦を説明する。

「まず最初にチーム分けなんだが……キリエは留守番だ」

「ええ!? 何よそれ!!」

まさかの待機命令に文句を言うキリエ。

意気込んでの参戦なら仕方ないかもしない。

「まあ、俺らの作戦が完全に失敗か全滅したら連絡を入れるから。そしたら悪いけどやり直してくれ」

少しバツが悪そうに言う黒斗。

さすがにやり直せるからと、わざわざ死んでもらうのは忍びないらしい。

「それに、今回の戦闘にキリエの実力だとどんな高価な魔法アブリを使つても参戦は厳しいかもしないんだ」

「……分かつたわよ」

不満たらたらだが、自分にしか出来ないことなので仕方ないと受け入れる。

「それじゃあ、残りのチームだが……」

そう言つて、作戦とチームを伝える。

まず、黒斗と三太。

この二人は鏡を守る。

ここには他にも多くの展示品があり、その関係でショーケースがたくさんある。

力のコントロールと対応力を鑑みての編成となる。

次に一空と九郎丸のペア。

こちらは刀を盗まれないようにする役目だ。

刀の展示が通路の中央に飾られているので、機動力と連携の取れやすさがある二人に頼むことに。

最後に、刀太と夏凜。

日本人形が二人の守る対象である。

この日本人形が一番ヤバい代物らしく、最も強敵が来る可能性が高いとのこと。

そのため、どんな相手でも踏みどまれる不死性の高いこの二人に任せることの算段である。

「異議を唱えます」

「おい！」

即答でプランを拒否した夏凜にツッコむ。

ただ単に、これだけの選択肢の中で刀太と組むのが嫌だつたのだろう。

そんな我が儘は無視して話を進める。

「ともかく、各員それぞれ戦闘とキリエに連絡する準備はしておけ」

「しかし黒斗殿、さすがに必ず全てを守りきるのは厳しいのでは？」

そう質問する九郎丸に頷く黒斗。

「まあな。だから別に、ただ失敗しただけでやり直す必要はないと思つてる」

「では、どういう事態なら？」

人差し指を伸ばして説明する。

「まずは、誰かが復活不可能なほどにやられた場合」

次に中指を伸ばす。

「次に、大量の物品が根こそぎ盗まれた場合」

最後に薬指を伸ばす。

「後は、相手の情報が全く得られなかつた場合だ。このうち一つでも実現したら必ずやり直してもらう」

それぞれ全ての失敗でやり直すことは全員納得がいった。

「まあ、着いたらまずは館長に話を通す。そんでもつて閉館した後から翌朝までが任務時間だ」

「ふうん、でもそんなすぐに来るの？」

三太の質問に首を振つて答える。

「いや、さすがに正確な日取りは分からない。けど、奴らがこういつた施設から物を盗む時は閉館時間中にしかやつてないからな。それで

この時間帯なわけだ」

「それに、ここを選んだのもまだ何も盗まれてなくて盗む価値の高い物が置いてある場所だつたからという理由が大きいわ」

黒斗と夏凜の否定の言葉に、刀太は嫌な予感がする。

「な、なあもしかして襲撃が今夜なかつたら……」

その不安から来る言葉に、厳しい現実を無慈悲に落とす。

「そりや、それまでは何日も張るぞ」

「襲撃されることはないのだから当然でしょ」

またも無期限任務の開催である。

あのどれだけ苦労を重ねても手こたえも任務完了に向かっている達成感も全くない時間を過ごし続けるのは、刀太にとつて苦痛になるほどのことになっていた。

「勘弁してくれええええええええ!!!!」

情けない悲鳴が上がる船は、もうすぐ塔にたどり着く。

海中都市の入り口へと。

「こう、お祭りつて意味もなくテンション上がるよね

……

取り戻せないことは、多々ある。

捨てなければいけないことも、間々ある。

どれだけ輝かしい未来を手に入れられるとしても。  
やはり、過去という宝石だけは。  
ずっと持つてみたいと思う。

……

アマノミハシラの海中都市直通エレベーター駅。  
そのホームにUQホルダーたちがいた。

人数は八人。

「ふん。遅かつたじゃないか、貴様達」

何故かそこに雪姫が居た。

「雪姫!? 何でここに!?」

「ちと、この街に用があつてな。ついでに貴様たちの案件がスムーズ  
に行くように手伝つてやろうと思つて来てやつたのだ」

雪姫が着いてくれるという安堵がメンバーに広がる。

「それは助かるけど、いいのか?」

「手伝うとは言つても私も忙しい身だ。こここの館長に話を通すくらい  
しか出来んぞ?」

しかし、戦闘の方はどうやら手伝えないらしい。  
残念だと肩を落とす。

「いや、助かる。むしろそつちの懸念の方が強かつたくらいだ」

その中で黒斗だけが喜んでそれを受け入れた。

「ではさつさ」と行くぞ

そう言つて、雪姫が先導する。

一行は、海中都市へ。

エレベーターの中での

「うひやあ！すっげえ！潜つてる！俺たち海の中潜つてつてるぜ!!」  
超ハイテンションな刀太がえらく興奮していた。

海中都市にはものの数分で着くという。

「それにも、運がいいな。貴様らは」

はしゃぐ刀太を楽しそうに見やりながら雪姫が呟く。

「運？どういうことですか？雪姫様」

「ああ、今そんな時期か……」

黒斗以外の面々が首を傾げている中、エレベーターが到着した。  
改札を出て、駅の外に行くと先ほどの二人の言葉が何を指している  
か、すぐに理解出来た。

第五回・海中都市竜宮都創立祭ルグト!!

出てすぐのところに大きくその文字が空中に浮かんでいて、街を見渡せば、提灯が飾られていたり、屋台が連なつていたりと、街中がお祭り色に染まっているのが分かった。

「わあ！一人が言つてたのはこのことだつたのね」

精神的に擦れ……大人なキリエもテンションがかなり上がつているようだ。

「そんじや、お前らまず宿を教えるから、そしたら時間近くまで自由時間だ。楽しんでこい」

「いいのか!?」

黒斗の言葉に最高だつたテンションが否応にも限界を突き破つて上がる。

「そんなにウズウズされちゃ、そう厳しいことも言えねえよ。それに、予定時間以外に敵が行動することはデータ上は一度もないからな」「じゃあ早く行こうぜ！」

そのまま駆け足で進んで行く刀太に慌てて付いていく九郎丸や三太。

「私たちも同行しなくてもいいのですか？雪姫様」

祭りでも冷静な夏凜が館長への話を通すのに、自分たちも行つた方がいいのでは？と思ひ聞く。

「まあ、こういうのは大勢で行かなくても見た目の印象一つで何とかなるんでな。私と黒斗だけで充分だ」

「え、でも見た目は黒斗も充分お子様じやない？」

「なら、これでどうだ？」

キリエの言葉に指を鳴らすと、一瞬で姿を変えた。

身長と髪を伸ばし、少し老けさせたので三十代ほどに見える。

「俺は元々不定形な存在だからな。外見はどうとでもなる」

目の色だけは何故か変わらんがな、という黒斗に、さすがに感心したキリエ。

そういうことなら、と地図のデータをもらい一足先に残りの三人で宿へ向かう。

「二応、後で刀太たちを宿まで引っ張つてやつてくれ」

「はーい」

一空が適当に返事しながら街へ向かった。

「それでは、我々も行くか」

雪姫に頷いて並んで歩いていく。

「久しぶりだな。お前と二人で組むのは」

美術館に向かいながら遠い目をして言う黒斗。

「懐かしむような思い出でもないがな」

対し、雪姫の目には少し苦いものが混ざる。

その頃は、ある意味最も世界の闇に触れていた時期でもあるのだから。

「ま、な」

黒斗本人も、深く触れたい話題でもないので適当に濁す。

「会つた時はああ言つたが、本当に余裕はないのか？」

ああ、とは有事の際に加勢は出来ないと言つたことだろう。

「他にも早急に解決するべき案件があつてな。どれも下つ端に任せただけでは解決が見込めそうにない」

「要は人手不足、と」

コクン、と頷く。

UQホルダーのナンバーズ、つまり力を持った幹部は少なくはない。

けれども決して多いわけでもない。

そして、その多くが今こここの任務に参加している以上雪姫にも負担や仕事は回ってくる。

緊急性や危険性の潜在値を考えると、どうしてもこちらの人員を減らすわけにもいかない。

「人数をそつちに回したいつつても、十蔵と甚兵衛さん借りるのは無理だしなあ……」

当然だ、とその考えを即座に却下する。

十蔵とは、UQホルダーで力・強さにおいて最強のナンバーズ。

甚兵衛は、最古参の不死者であり、UQホルダーの原型を作った人物だ。

甚兵衛自身はそこまで強くないと自称しているが、千四百年も生きていて長いこと戦闘もしている。

これだけの圧倒的経験値を持つた御仁が弱いわけはない。

そんな二人がいてくれれば、何も気兼ねすることなく任務を完了して元凶まで辿り着けるだろう。

二人とも別に頭脳派という訳ではないが、戦闘面での心配がなくなるだけで充分心強いのである。  
「こちらの件にこれだけの人数を割いてるんだ。これで進展しなければ酷いぞ？」

「進展はするだろうよ。ただ、早期解決出来るかは保証出来ない」  
脅しも含んだ言葉に、見栄は張らずに正直に話す。

敵の情報がほとんど手元に無い以上、先手を取れないのが手痛い。  
かといって、ここでああだこうだ言つたところで意味はない。もう既に話し合うべきことは話したし、この雪姫に言つても今の段階では何も進展に繋がらないのである。

「…………

そのまま特に喋ることもせず歩いていた。

そこでふと、黒斗が口を開く。

「……なあ、俺を愛せる存在つて何だと思う?」

「はあ?」

いきなりの質問に面食らうを通り越してドン引きだ。  
いくら何でも意味不明過ぎる。

「何を言い出すのだ、貴様は?」

「いやなに、敵の一人の狙いが完全に俺みたいでな。そう言われた」  
報告の時に言わなかつた会話内容を簡潔に伝えると、これ見よがし  
にため息を吐かれた。

「なんだよ?」

「これがため息を吐かずにいられるか」

そう言つてもう一度ため息。

「貴様、愛に格が必要だなどと本気で思つているのか?」

「いや、んなことは……」

「ましてや資格など……そんなものが関係ないと初めて教えられたの  
は、紛れもなく貴様だぞ?」

「誤解を招く言い方をするな。俺とお前の間にあるのはギブアンドテ  
イクの信頼関係だろうが」

からかう様に言われた言葉をピシャリと否定する。  
「それは違ひない。だが、貴様は夏凜と……」

「言うな!」

突かれたくない部分に触れられそうになつて、強く止めた。

「言うな。それに、結局は何の意味も無かつた……いや、無くなつたん  
だから」

遠い目をして、これ以上話し掛けるなという空氣を作る。

その目には寂しさよりも諦めの色が強いように見えた。

「全く、相変わらず不器用な……」

「ほつとけ」

それきり会話は無くなり、少し入り組んだ道を抜けて美術館に辿り  
着いた。

「U・Q・ホルダーだ。ここに館長と話がしたい」

警備の者に伝えて、応接室に通される。

ここからは仕事の話し合いだ。

雪姫と黒斗が館長と話している間に、残りのメンバーは既に宿に荷物を置いて、祭りに参加していた。

「ふお～い、ふふおふあふふおほつひほいお」

「刀太くん。とりあえず、口の中の物を飲み込んでから喋ろうか」 中でもテンションの高い刀太を九郎丸が時々ブレーキを掛けながら見て回る。

ちなみに今のは、「お～い、九郎丸もこっち来いよ」と言っていた。「お、射的じやねえか！」

と、昔懐かしい射的の屋台を見つけた。

「なあ、三太。これやつてこうぜ！」

「いいよ」

一緒にいた三太とお金を払つて弾をもらう。

「それじゃあ、僕もやろうかな」

そこに一空が加わろうとする。

「いやあ、ロボットの一空先輩が射的をするのってかなり反則気味な気が……」

そうかい？と首を傾げる一空に揃つて頷く面々。

それなら、と今回は不参加になつておく。

パコン！

「だああ！上手く当たったのに!!」

最後の一発で傾きそうだつたにも関わらず、残念ながら倒れず失敗。

パコン！

おおおおおおお……

逆に当たれば倒しては歓声が静かに上がるのは三太だ。

「ふふん」

珍しくドヤ顔まできめている。

「すげえな、三太！」

「ま、まあ、これでもF P Sのランカーだし……」

「マジか!? すげえ！」

幽鬼としての存在と力に目が行きがちな三太だが、同時にかなりのゲーマーもある。

そこで培つたスキルで、しつかりと的に当てていく。  
そして最後の一発。

パソコン！

パタリ。

おおおおおおお!!!

全弾で商品ゲット。しかも最後にはなんかお高そうな封筒も倒したのだから盛り上がりがない訳がない。

「なんつう腕してんだよ……ほれ持つてけ泥棒！」

悔しそうに雑に景品を渡される。

「へへっ」

得意氣に受け取つて中身を確認する三太。

「なあなあ！ 何が取れたんだよ!?」

「ちよつと待つて。えつと……」

お菓子、ぬいぐるみ、タバコ、ライター、そして。

「なんだ？ これ」

最後に封筒の中身を確認すると、出てきたのは『竜宮都ベストコンビ大会特別出場権利』と書かれた紙が入っていた。

「ベストコンビ大会？」

揃つて疑問符を浮かべるメンバーに、やれやれと言つた感じで説明する屋台の店主。

「なんだよ知らねえのかよ。そいつあ、この祭りの名物でな。つつてもやること簡単だ。登録した二人が祭りと一緒に見て回るだけだからな」

「え？ それだけ？」

「けど、その様子を祭りに参加してる全員から見られる。んでもって、祭りをいつちやん盛り上げたコンビは誰だ？ つてのを決めるんだよ」

そして、その優勝者には豪華景品があるとか。

形式で競うつてこつた」

細かい部分は全くもつて分からぬが、とにかく祭りを楽しめばいいってのは理解したメンバーたち。

「んで、三太、どうすんだ？」

いや！俺はいいよ！」

「はいこれ！刀太兄ちゃんが誰か誘つてやれよ」

舌暴に渡して別の屋台に行き、その後を一空が着て、いく。

「おう、なんなら男女ペアで出とけや。その方が盛り上がるし、優勝者

も大抵はカツプルだからよ」  
アドバイスのつもりで店主が出した情報に、パツと食い付いた人物  
が一人。

二三

[.....]

一夏凜先輩「これ、どうぞ……」

素つ氣無いような言い方だが、その手の動きは光速と見紛うほど速

かつた。

早速中身を確認したところ一枚入り。

なんと二つの枠を獲得したらしい。

「片方はあなたに返すわ」

口調は淡々としてるのに、滲み出る嬉しさの迫力が凄くてドン引きしか出来ない。

「ん、でも誰と参加すつかな?」

「あ、男女ペアつてことなら私が出てあげなくもないわよ?」

貰つたはいいが、相棒に悩む刀太にキリエから声が掛かる。

「でも、キリエ。お前そんなはしゃげるのか?」

「うつ

何気なくされた指摘がキリエに過剰クリーンヒットする。

自分の<sup>や</sup><sub>り</sub>直<sup>直</sup><sub>シス</sub>有<sup>ス</sup>能<sup>キル</sup>力で多くの(特に死の)体験を経て<sup>ス</sup>いるために精神的に大人なキリエは、怒りなどの感情表現は素直でもリアクションはあまり大きくない。

いや、正確にはプライドのためにオーバーリアクションをしないよう心掛けていると言つた方がいいかもしない。

「でも、他に組んでくれる女性なんて……」

悩んでいる横で夏凜の視線がある一点に突き刺さるが、当の本人は顔を背けてこれを拒否。

と、そこへ。

「あ? お前ら、屋台の前で集まつて何してんだ?」

「何やら困つた様子だつたが、何かあつたのか?」

「あ?」

丁度いい人材が合流した。

「かくかくしかじか説明ちうく

「はあ。つまり、俺らにそのお祭り盛り上げ大会に参加しようと? わざわざ任務に来て注目されろ、と?」

基本的に表舞台に立とうと考えようともしない黒斗はため息を吐きながら確認をとる。

「ほう、中々面白そうな企画だな」

完全呆れ顔の黒斗に対し、意外にもノリノリな雪姫。

「お前がこういう催し物に参加すんのは珍しいな、どういう風の吹き回しだ?」

「なに、こういつたうるさいほど賑やかな騒ぎは……久々、でな」

黒斗の質問に、遠い目をして返す雪姫。

その目は少しだけ寂しそうに見えた。

## デートの甘さに苦味のアクセントつて至上

どんな愛がこの世にはあるのだろうか。

仲間意識は、分かる。

大切も、分かる。

師弟愛も、理解している。

恋愛も……不本意ながら。

家族愛は……

まだ、もう少し。

お祭りを盛り上げたコンビを競うというイベントに、刀太と共に参加した雪姫。

「あ、おい雪姫！あっちにたこ焼き売ってるぜ！」

「分かった分かった。今行くから」

はしゃぎ回る刀太にやれやれ、といった様子で追いかける雪姫。

その様子はどう見てもカツプルよりも親子のそれだったが、それでも二人は楽しそうに見えた。

その二人の腕には腕章が着いている。

コンビ大会参加の証だ。

今このこの様子もお祭りの参加者に微笑ましい視線でもつて見られている。

(あいつ、一応警戒しとけって言われたの忘れてるんじゃないだろうな？)

表向き楽しそうに——いや、実際楽しんでいるのだが——その裏で

静かにため息を吐く。

こうしている間も、敵が潜んでいる可能性は十二分にあるのだから

ら。

「一時間と少し前」

「とりあえず、俺のイベント参加が決まった以上は行動の指示を出させてもらうぞ」

苛ついた様子の黒斗が全員に警戒するように伝える。

「あれ？ でも相手は今、行動を起こさないって言つてなかつた？」  
特に何もしなくてもいいと言わっていたのに、トキリエが疑問を口にする。

「本来ならな」

青筋が立っているのを見ると、これから出す指示を黒斗一人でひとつりと行う予定だつたらしい。

その黒斗に、射的を当ててしまつた三太と完全お祭り気分の刀太は少し反省した。

しかし、夏凜はそっぽを向いて反省した様子はない。

「おい、お前は特に反省しろ。浮つきやがつて……」

「……別にいいじゃない。これくらい」

小さな咳きは全員の耳に届かなかつたが、それでも不服なニュアンスは伝わってきた。

そんな夏凜に新鮮さすら感じているメンバーとさらに青筋が増え黒斗。

「このつ……ーごほん。とにかく、このイベントに参加しない四人は例の美術館を張つてもらうからな」

しかし、ここで言い争いをしても何も始まらないので気を取り直してやることを説明する。

「一空、超小型カメラはあるか？ 出来れば目線で録画出来るものがいい」

「ちょっと待つてね……え、と、ほら、これ」

そう言つて右腕の中が開いて出てきたのは耳に掛けるタイプの、どう見ても盗さ~~せ~~立派な隠しカメラが出てきた。

「よし、そいつを使って一日一人ずつ交代で観察してくれ」

「え？でもちやんと見張るなら全員で見たほうがいいんじゃねえの？」

「刀太君、それだと敵に対して『僕たちは全力で警戒していますよ』つて教えるいるようなものだよ」

九郎丸の答えに頷きながら詳しい指示を話していく。

「あそこは広いからな。全体をそうだな……一回か三回、んでもつてそのカメラに客の大半が映るように軽く見渡すようにしてくれ」

「あれ？よく見ないと……あ、そつか。さつき九郎丸の兄ちゃんが言つてたのと同じか」

小さい声で三太が質問しようとするが、同じ事の繰り返しだと理解する。

実はデータの通りならば、敵は閉館して警備の者しかいないタイミングで行動するのでこの見張りは意味がない。

なにせ警戒するべき時に警戒すればいいだけなのだから。  
けれど、ダメで元々。収拾出来る情報が欠片でもあればそれで良し、という訳である。

「それに、もし上手くいけば……俺の方に何か釣れるかもしれないしな」

さらには今回のイベントで黒斗が注目されれば、黒斗狙いの敵が接触か何かしてくる可能性もある。

通信魔法越しであれだけのプレッシャーを放つ相手では危険度が高く、リスクリターンは良くないと思う。

それでも今は少しでも情報が欲しい。

もしもそれが知っている相手なら対策も立てられる。

「あれ、でも黒兄

と、そこで何かに気付いた一空が質問する。

「そういうことなら、このイベントに参加出来たのってプラスじゃないの？」

少し意地の悪い笑顔で聞く一空だが、それが地雷だったようで再び青筋が浮かび上がる。

『本来なら』、俺が一人でこの街全体を安全に観察する予定だつたの

を、誰かさんが乗り気なせいで『リスクの高い』凶作戦なんてものを実行するハメになつたんだからな?」

「えと、その……『めんなさい』

しゅん、とする一空だが下手に突付いたのが悪いので誰からもフオロ一は入らない。

「まあ、当面は余程熱心に展示物を見てるわけでもないのに同じ奴が何日も長時間居るようなら、顔を覚えておいてくれって程度の話だからあんま氣負わなくていい」

一応、警備開始前に確認するけど、と言つて立ち上がる。

作戦会議はこれにて終了らしい。

「んじゃ、俺たちも行こうぜ。雪姫」

――という経緯があつたのだが、刀太の様子を見ていると何処まで理解しているのか不安になる。

ふと、祭りの賑やかな光景を見やつてまた遠い目をする。

(本当に、煩いな……)

言葉にすると悪意満点だが、懐かしむ表情で笑つている雪姫。その目に映つてるのはいつの頃の話なのか。

「おいどうしたんだよ? 雪姫」

いつの間に戻つてきたのか刀太が目の前に来ていた。しかもその手にはたこ焼きが乗つかつていて。

「ほら、美味そうだろ?」

そう笑いながら楊枝で刺して口元に持つていく。いわゆる、あくんというやつだ。

「あむ……むぐむぐ、んぐ。ほう、確かに美味しいな」

今更照れるわけでもなし、素直に口を開いて食べる。

「だろ!」

やつぱこれだよなー! と言いながら、自分で食べたり雪姫に食べさせたりしてあつという間に完食。

「んく、美味かつた!」

ゴミを捨てるとき、次の屋台を探してキヨロキヨロし始める刀太。

また何処かに行つてしまいそうだったので、雪姫は苦笑しながら刀太の傍へ。

「馬鹿者、女連れの男が勝手にほつつき歩くな。ちゃんとエスコートしろ」

そう笑いながら刀太の手を取る。

「お、おう。そうだな」

少し戸惑い気味で顔を赤くする刀太。

「ん? どうした刀太。恥ずかしいのか?」

その隙を逃さずからかう雪姫。

「んなわけあるか!」

まだ顔は赤いが、それでも手を強く握り返して引っ張つて行く。

「……ふふ」

その様子がなんとも微笑ましくて、小さく笑いながら付いて行く。

そんな二人はやはり親子にしか見えないが、それでも楽しそうだった。

一方でよろしくないのが黒斗・夏凜ペアだ。

手を繋ごうとしたり、腕を組もうとしたり、お店に並ぼうとしたりするのだが、その全てをむすつとした様子で躊躇し続ける黒斗。

「いい加減に観念しなさい」

「断る」

それを幾度か繰り返した後に言葉でもアタックして、これも躊躇される。取り付く島もない。

「……イギリス紳士のくせに」

なので、攻め方を変えた。

「なんだと?」

そして予想通りに黒斗が反応を示す。

生き残るためならプライドなんて欠片も役に立たないと思つている黒斗だが、イギリスで長年活動し、民間人に紛れ込んで過ごすこともあって、紳士としての振る舞いは決してそこのカツコ付けの見

榮つ張りには負けない自信がある。

「こういう場で紳士として対応出来ないのに、よくもまあ胸を張つて言えたものね」

「~~~~~!!」

だから、結構簡単に揺さぶれる。

黒斗のことを知っているのはなにも雪姫だけではない。

長いこと一緒に住んでいた夏凜だ。このくらいは朝飯前である。

夏凜に対する苛立ちと紳士のプライドの葛藤の末。

「……………ほらよ」

プライド大勝利。

差し出された手を握り、掴んだ戦果に微笑む夏凜。

そのまま二人は連れ立つて歩いていく。

先ほどよりゆっくりとした、夏凜がいつも歩いている速度で。

「なんか、久しぶりだな」

ゆっくり手を繋ぎながら歩いていると、突然刀太が呟いた。

「何がだ？」

「いや、雪姫と二人で……こう、ゆっくり過ごすのがさ」

「たかだか数か月前の話だろ？ 私にとつては一瞬だ」

暗にそのうち刀太もそうなると語っていた。

不死者にとつて、よりよく生きるためにとか、生き抜くためにといつた普通の人間が持つ感覚は持つこと自体意味がない。

なぜなら死ないから。

生きることを強制されるから。

だからこそ、どう生きたいかが重要になる。どんな存在になりたいか、それを追い求めるここそ不死者にとつて意味が生まれる。そこで何を為すか、それがなければそれは不死者ですらなくただの浮浪者、漂流者でしかないのだ。

UQ ホルダーを作った雪姫はそう思う。この組織で過ごす者たちにとつて生きることに意味を見出せるような居場所になるように。

「まあ、そうかもしないけどよ、最近は色々あつたからな」

とは言つたところで、刀太は不死者になつて日が浅いどころか生きている年数そのものがまだまだ短い。

死生観は置いておいても、まだまだ普通の人としての感覚は残つているのだろう。

「退屈などではなかつたのだろう？」

その言葉にもちろん、と頷いて、

「でもやっぱこんな時間もたまにはいいかなつて」

そう言つて無邪気に笑うその顔が、意外にもいつぞやの誰かと重なり格好良く思えて。

「なんだ？ 私とデートしたければ暇があればやつてやるぞ？」

ついからかつてしまふ。

「そつ、そんなんじゃねえ!!」

顔を真つ赤にして叫ぶ刀太に笑いが止まらない雪姫だつた。

「そら、お待たせ」

「あ、ありがとう」

ぎこちない仕草で黒斗が買つてきてくれた飲み物を受け取る。

ちようど喉が渇いていたところだ。

中身もちゃんと冷えたお茶を用意してくれている。

好みもタイミングも完璧に合わせてお店に並ばせず、座つて休憩する場所も確保。

非の打ち所のない紳士たる振る舞い。

その辺りは流石としか言いようがない。

とはいえ、ここまでピッタリ合わせられるとちよつと引く。でも嬉しく思う。

「…………なんで」

黒斗が自分の好みなど細かいところを覚えていてくれたことも、自分を気遣ってくれることも、今自分のことを見ててくれていることも素直に嬉しい。

そう、嬉しいのだ。

しかし、だからこそ。

だからこそ言葉が口を突いて出てくる。

「なんで、今まで……」

黒斗は、何も言わない。応えない。

どんな顔をしているのかは俯いている夏凜には分からない。  
辛そうな顔をしてくれれば、少しは救いだ。  
けど、そんなことはないのだろう。

「今まで、ただの一度も」

そう思うと、言わないと決めた言葉が。

「会うことも、声を掛けてくれることも」

これまで三百年もの間我慢してきた文句が。  
「なんで一度だつてしてくれなかつたのよ!?」

溢れて止まらない。

「答えがいるのか？」

「分かつてる……分かつてるわよ！」

予想していた通りの返答に、涙が浮かんでくる。

けれど夏凜は、いや夏凜以上に理解している者などいない。  
だが、しかし。

「けど……けど！」

それでも。

例えどうだつたとしても追い求めたくなる。

『あの頃』の、穏やかで優しい日々を。

「俺に、希望を持てどでも言う気か？」

その願いをばっさり切り捨てられた。

予想できていたことはいえやはり言われるとキツい。

だが、黒斗に希望を持つと言ふことは同時に絶望しろと言つていることと同義だ。

それくらい黒斗の希望は、光は最悪の形で黒斗を絶望と闇の底へ叩き落してきた。

確かにそんな黒斗には酷かもしれない。

それでも。

「私と居てよ。ここに、居てよおつ……！」

求めずにはいられない。

黒斗と共に希望を持つていたい。

その願いをどうしても黒斗と見たいのだ。

「俺は……」

何かを言いそうになつて。

「…………」

口を噤んでしまう。

「何？」

言葉の続きを求めて聞くが、黒斗は口を閉ざしたままだ。

夏凜はこの沈黙を、言いたい希望があるが言うべきではないと判断してのものだというポジティブな捉え方をしていた。

しかし、黒斗の頭にはそれとは違うことが思い浮かんでいた。

——あなたを真に愛せるのも、あなたがまともに愛せるのも、私がなんだからね

それは少し前に言われた言葉。

人ですらない自分を愛せるという少女（らしき人物）。

思い当たる人物はいなかつた、と思う。

よくよく記憶を思い返してもあれだけ自分に心酔したような者も、自分の正体を知っていても愛せると宣言する者も誰一人引っ掛からない。

（けど、俺をここまで知る奴が敵なんだ。気を引き締めないと最悪……）

そこで、涙目の夏凜と目が合う。

拳を強く握る。

『あの頃』からこれは決めていたことだ。

これからも変わらない。

でも、今この瞬間くらいはいいだろう。

「とにかく今はお祭りを楽しめねえともつたいねえ」

もう一度手を差し出す。

「幻想の中くらい、夢を見ようぜ」

その言葉に涙がこぼれそうになるが、寸でのところで留まる。

「……そうね」

無理矢理にでも笑つて着いてこうとしたところで。

「おう、兄ちゃん。可愛い娘連れてるじゃねえか？」

チンピラ三人が絡んできた。

「いいところで……」

もはや殺意すら漏れるほど恨みを込めて呟く。

チンピラの方は何も気付いてないのか夏凜の肩に手を回そうとする。

それを力尽くで振り払う前に。

ポイッ。

そんな音が似合いすぎるほど見事にチンピラの一人が宙に舞った。

「げはっ！」

重力のまま地面に叩きつけられて氣絶する。

綺麗すぎて一瞬何が起こったのか誰も理解していなかつた。

が、それも数秒。

「このやろつ!!」

怒ったチンピラ二人が飛び掛る。

とはいえ所詮は素人。

ヒヨイツと簡単に躱すとチンピラ二人の流れを攻撃しながら操作する。

と、一人の重心がずれて体勢を崩したので仕掛けた。

胸元を掴んで横に引っ張り、もう一人をキック。

するとキレイに二人の顔が近付いて……

ぶつちゅううう!!!

団体のややでかい野郎二人の熱烈キッス。

吐きそくなつてorz状態になつてゐる一人の顔の間に踵を本気で落とす。

バキイイ!!

地面のコンクリートにヒビが入つた。

「まだやるか?」

優しく語り掛けるように聞くと、顔を青くして気絶したチンピラを連れて全力疾走で去つていった。

「まつたく……ああいう手合いはいつど、でもいるのな」

呆れていると、周りから拍手が上がった。

「あ、注目されてるんだつけ」

完全に今の今まで忘れていた。

しかしまあ、結果オーライだろう。

「その、ありがとう」

注目されて恥ずかしいのか顔を赤くして傍によつて来る夏凜。

「まつ。何もなくて良かつたよ」

紳士としての対応でそそくさとその場から歩いていく。  
その気遣いをまた嬉しく思つて着いていく。  
もちろん、手は握られたまま。

飲み過ぎ食べ過ぎ居心地悪過ぎには注意！

……

長い、とても永い時間、病に臥せっていた生きることが辛いと思った。

けど死にたくないと思い続けた。

それが報われた時、あつたのはただ感謝。だから「生きよう」と決意した。

それが、最初の恩返し。

……

——美術館にて。

「これが……」

今日の監視担当は一空だ。

キリエは相手にされなかつたと怒つて屋台巡りに行き、残りの三人で相談し三太と九郎丸がキリエをなだめる役に。そして一空が美術館を担当することとなつた。

とはいえる監視の初日だ。余程怪しい行動をとっていないなら注意・警戒する必要もないだろう。

なので、全体を一時間ほど掛けて見て回つた後、一空は件の展示物を見に行くことにした。

今見ているのは日本人形だ。

魔法には少々疎いサイボーグの一空だが、この人形のヤバさははつきり伝わってきた。

まず、傍目にも分かりやすく封印がなされている。

ショーケースの内側に札がいくつも貼つてあり、ショーケースの周囲にも工夫が施されていた。

そこには普通の模様のようにデザインされた床に見せかけた魔方

陣が描かれていたのだ。

さらにこれは一空だからこそ分かつたのだが、封印が破られた際にいつでも破壊できるように銃口がいくつも人形に向けられている。

これはもう異常と言う他ない。

しかし真正面から人形を見て。

悪寒が、駆け巡った。

その瞬間納得する。

この厳重な警戒は当然のことだと。

もしも一空が生身の人間だつたら、滝のような汗が流れていただろう。

(ニ、これは……とんでもないな……)

たかが人形、などとは決して言えないねつとりとした負の感情。それがプレッシャーとなつて一空にまとわり付いてくる。

数十秒も経つてようやく一空はその場から離れたが、その緊張感は仲間たちと会うまでは弛むことはなかつた。

「もう！なんだつてのよ!?」

あむ、もぐ。

「何が『お前そんなはしやげるのか？』よ！失礼しちゃうわね！」  
もぐもぐ……ぐくん。

「そりや一瞬、優勝は難しいかなとは思つたわよ！」  
ぐぐぐく、ぷはあ。

「だからつて……！」

「うん分かつた。分かつたから一回手を止めよう、ね？」

「そ、そうだつて。今回はたまたま雪姫様が来たからそつち行つ  
ちやつただけだつて」

「ふん！」

なだめられ、一度ヤケ食いの手を止める。

目の前にはまだまだ山のようにある屋台の食べ物。行く先行く先でささつと買えるものを二つそり買っていった結果である。

もう分かりやすいほどの暴飲暴食ヤケ食い祭りだ。

よつぽど刀太から言われたダメ出しがプライドを傷つけたらしい。さすがにまだまだ肉体年齢的に子供のキリエに自分の体重の一割近くありそうな食事をさせるわけにも行かないでの、止める二人も必死である。

この三人でも食べるのが無理そうな量なのに限界を超えて食べてしまつたら——主に体重計の上で——後悔すること必至なのだ。

「うふ」

数分もすると、もうすでに満腹を越えてたのか若干辛そうな顔をする。

「大丈夫かい？」

「……………へ、平気よ」

(駄目だなこりや)

二人の心は一致した。

とにかくうちわで扇ぎながらキリエを休ませることに。「で、これからどうする?」

「うん、とりあえずキリエが動けるまでここで待とうか」

さんせーと三太から同意が上がったのでそのまま寛ぐことにした。

チンピラを撃退してからしばらくして。

夏凜が小腹が空いたと言うので屋台に並んだのだが……

「お、兄ちゃん。さつきは格好よかつたぜえ?」

「あらまあ、べっぴんさんだこと!こりやたあんとサービスしなきやだね」

「ねえねえ!あの時どうやって倒したの?」

「あいつらが熱いベーゼを交わした時は腹抱えて笑わせてもらつたわ！」

「な、なんというかむず痒い！」

「ほらー！いっぱい盛つたからしつかり食べな！」

「お、おう……」

「こういった純粹な善意に中々馴染めない黒斗の動きはぎこちない。礼くらい言いなさい。ありがとうございます」

「なあに、良いってことさね！」

逆に嬉しく思い、柔らかく微笑むのは夏凜だ。

彼女は普段こそ鉄面皮だが、誰かからの温かい心に触れることが好きで、時折こうして微笑むのである。

その表情は一輪の花を思わせるような美しさで、周りの男たちを魅了している。

「と、とにかく行くぞ！」

居づらそうな黒斗が夏凜の手を引っ張つてその屋台の付近から連れ出した。

瘴氣でできている黒斗は、こういった温かみのある空気というのが苦手で、かなり強引に進んでいく。

囁し立てる口笛をBGMに。

「ともかく、やることはキチツとやらないとね」

日本人形の寒気は取れないが、かと言つてそれで逃げ帰るつもりもない。

一空は内心嫌なものが燻つっていても己の役割のために美術館を周つていた。

ささつと見回る程度なので、それほど大変でもない。多少の広さを持つついても2時間3時間もあれば充分見れる。

今は特におかしなところはない。

(いや、すでにおかしいところだらけだけどね)

一空も黒斗からリストをもらっているが何より、曰く付きの物品の

多さが目に着く。

何せ可能性の低いものを合わせれば百を下らないのだ。

よほど最初に集まつたものがそういうしたものだつたのか。

「あるいは、それらを集めようとしたのか。かあ……」

黒斗がどう考えているかは知らないが、そう考へると、こゝも充分きな臭い。

警戒は怠らない方が――

トン

「おつと、失礼」

考え方をしていたら、途中で人とぶつかってしまった。

「いえいえ、こちらこそ申し訳ない」

ぶつかつたのは、シルクハットとステッキが見事な紳士だつた。  
「ふふふ、若いのに随分と渋い趣味ですなあ。あなたほどの年齢なら  
外の方が楽しいでしよう」

「いえ、これからお祭りには参加しますよ。ただ、こここの美術館は有名  
ですからね」

咄嗟に取り繕つた意見だが、上手くまとつた。

「ほうほう、それはそれは。勉強熱心で良いことです」

「ありがとうございます。ムツシユはまたどうしてここに？」

「ほつほつほ。こうして歳を取ると、中々どうして同じように時を歩  
んだものを、見てみたくなるものでしてなあ」

「そんなものですか？」

ベッドの上とはいえ長年生きていてもそんな考えには至らなかつ  
た一空からしたら新鮮な意見だ。

「ええ、言うなれば彼らは同志、と言つても過言ではありません」

「変わつた考え方ですねえ」

「ほつほつほ。よく言われます」

朗らかな笑みを浮かべて老紳士はその場を立ち去る。

「それでは、また縁がありますように」

「次はぶつからないように気を付けますね」

ほつほつほ、と笑う老紳士のおかげで、張り詰めたものが少し緩和

してくれた気がした。

「……ありがとうございます」

小さい声で、その背中にお礼を言つた。

「はあ、この辺なら大丈夫だろ」

あれから注目され続けるのが嫌になつた黒斗は、人目につかなそうな場所まで走つてきてようやく息をついた。

その様子はだれがどう見ても疲れ果てている。

「何もそこまでしなくてもいいじゃない」

涼しい顔をしている夏凜はあきれ顔だ。

「そうは言つても仕方ねえだろ？俺、あんなとこに長時間居たら浄化しちまうよ」

以前にも言つた通り、黒斗の身体は瘴気で出来ている。  
それ故に、澄んだ空気の中に居続けるだけで存在の維持のために自身の身体である瘴気を消費してしまうのだ。

「ふふつ」

「何だよ？」

くすっと笑つた理由が分からず聞き返すが、夏凜は答えない。

首を傾げて、しかし理解できないので、まあいかと流す黒斗に夏凜は笑みが零れて止まらない。

（そう言う割に、手は離さなかつたのね）

神に愛され常に浄化されていると言つても過言ではない夏凜と触れることは、黒斗にとつて間違いなくダメージになるにも関わらず、その手は離さなかつたのだ。

これを嬉しく思わず、どう思えというのか。

しかも、本人はそれに気が付いてないのだから笑つてしまふ。

紳士としての対応以上の何かを確かに感じられるのだから。

「少し休んだら、そろそろいい時間だし、ホテルに戻つて雪姫様たちと合流しましよう」

その提案に頷いて、腰を落ち着ける黒斗と、それを笑顔で見守る夏

凜。

周りに人がいれば、二人はカップルにしか見えないだろう。  
それほどまでに、二人の間の空気は柔らかかつた。